

機動戦隊アイアンサーガ ～外伝if「remember you」～

今野一正

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※この作品は外伝イベント「予兆」「ブレイブ」期間限定イベント「ファイアワーク」のネタバレを含む可能性があります。

因縁の地、いつかの宿敵、もう一度歩きだした少年は再び運命に弄ばれる。

これは本来存在しないはずのあったかもしれない世界の話。
もう一つの鋼鉄アイアンサーガの物語

目次

プロローグ	1
不幸な再会	
1話	4
2話	10
3話	18
memory and fire	
1話	25
2話	31
3話	38
4話	48
5話	56
6話	63
6・5話	72
存在理由	
7話	76
8話	80

プロローグ

人々が寝静まる夜更け、USFの兵器開発所の休憩室で二人の男が屯していた。

一人は疲れた表情にくたびれた白衣を纏い、もう一人は目を浴びたことがなさそうなほど白い肌とは対照的に茶色のセーターを身に纏っている。

「なあ、お前さんはあの最新型のダガーをどう思う？」

白衣の男がタバコの煙を吐き出しながら目の前でコーヒーを飲む青年に訊ねた。

「あれか？ あんなものいくら造ったって金の無駄さ。BMはワンマンアーミーになんてなれやしない。そんなことができるのは精々人外連中の「教廷」か、あるいは強者揃いの「流砂」くらいなものさ」
青年はそうつまらなさそうに言葉を吐くと空き缶をゴミ箱に放り投げた。

「第一、ダガーシリーズの利点は複数人による視覚リンクと搭乗者の命を喰らうあのイカれたシステムだ。今作られているのはダガー本来の設計思想からかけ離れている」

弧を描きゴミ箱の中に空き缶が消える。白衣の男が一際長い息を煙に乗せて吐いた。

「さてと、愚痴ばかり言っても意味がない。お仕事再開といこう」

男がタバコの火を消した瞬間、施設内の静寂を巨大な爆発音が破った。

「——なんだ!？」

非常灯が点灯し赤いランプに染まった室内を青年が見渡す。

「ああ！ そんな馬鹿な！」

何かに気が付いた白衣の男が窓に駆け寄り声を荒げた。

「ダガーが、動いてる！」

「なんだとー！」

男の言葉を聞き青年は彼と同じ窓を覗く。青年は目の前の光景を見て目を疑った。

兵器廠から赤々と上り揺らめく炎。

そしてその中心にはつい数時間前まで自分たちが整備していたはずのBMが屋根を突き破り上半身を露出させていた。

「なんで、あいつが動いてるんだ!」

白衣の男が目を剥きながら叫ぶ。

「知るか! —— 見ろ、守備隊が来たぞ!」

紅蓮に揺らめくダガーの後方、そこから三機のリンクスが現れた。ダガーはそれに気が付いたのかその方向を見つめると今まで静止させていたその巨体を屈ませる。バックパックから青い炎が噴き出し、青い機体は自分がいた場所を瓦礫の山に変えて空に飛び上がった。

直後、リンクス達の照準が上空の青い機体を捉え、武装を一斉に発射させた。

弾丸、ミサイル、

おおよそ武器と言える武器の全てが上空のダガーに向けて浴びせられる。

しかしそれを泳ぐかのような軌道でダガーは弾丸の雨を回避した。

「なんだあの動き!」

白衣の男が信じられないと言った表情で目の前の光景を見る。

ダガーは空中で一瞬静止すると急降下して一機のリンクスに狙いを定めた。

再び始まる集中砲火、ダガーはそれを一切の無駄が無い動きで躲すと目標を体当たりで押し倒した。

火花を散らしながら一機のBMが滑走路を転がる。目の前に迫るダガーに対し押し倒された機体が右手に持っていたライフルをダガーに向けた。

——ズガンッ!

放たれた弾丸は敵の横スレスレを掠めて空に消える。ダガーはそのまま直進し、リンクスのコクピットを足で踏みつけた。再びリンクスの腕が敵に向けられる。しかし

青の機体はそれを片方の手で押さえると自分の胸元にたぐり寄せ

た。

ダガーの踏みつけた足に一際強い力が込められる。ミチミチと不快な音を立てる腕関節の駆動音、振りほどこうと足掻くリンクスに對してダガーは無慈悲にその腕を引き千切った。

脱力し、鉄クズと化した右腕が地面に落ちる。ダガーは銃のグリップを握りしめると追ってきたリンクス二体のコクピットをいとも簡単に打ち抜いた。主を失った二機の機体はダガーの横を通り過ぎ、巨大な水しぶきと共に海へ沈んだ。

押さえつけられたリンクスが自らの体の上に乗った足を払おうと片手でもがく。自分の眼下にいる隻腕のリンクスをバイザーの奥にある青いツインアイが睨んだ。

——ズガンツ！

眼の前の機体が動かなくなるのを確認するとダガーはその銃を投げ捨てる。そして背面に備え付けられた巨大な武装を起動させた。

鋼と鋼が重なりあい、巨大な砲身が形作られていく。ダガーはそれを自分の目の前に突き出すと、発射口に青白い輝きが集まりだした。

「おい、早く逃げろ！ あれはヤバイ！」

その光景を見た白衣の男が一目散に逃げだす。しかしそれが無意味なことだと青年にはわかっていた。あれが発射されればこの施設は跡形もなく消え去ることを。

限界を迎えたその砲身から巨大なエネルギーが放出される瞬間、青年は無意識につぶやいた。

「ワンマン……アーミー」

不幸な再会

1話

シーギガントの端、チャバ砂漠。

地上を焼き焦がす太陽と地平線の果てまで続く広大な砂漠。その地獄を絵に描いたような場所を二機のアイアンヘッドが砂埃を立てて進んでいた。

「ああ！ 関節に砂が入ったああ！」

橙色の機体アイアンヘッドSを駆る少女の悲鳴にも似た絶叫が響く。

「ちゃんと防砂処理をしたはずなのに！」

その隣から青色のアイアンヘッドLGが現れた。

「昨日寝ぼけた状態で機体の整備なんかするから……」

「まったくシャロは……」と少年の声がノイズ交じりの声がスピーカーから響く。

「出発まで時間なかったんだから仕方ないじゃん！」

少女は隣のアイアンヘッドLGに向かって怒鳴りつけた。

「そう言うアルトはどうなのよ！ しっかり防砂処理してあるの？」

「アルト」と呼ばれた少年は自分の計器を確認し、異常が無いことを確認するとシャロに向かって喋りかけた。

「こっちは問題なし。砂嵐の中にでも入らない限りは大丈夫だと思う」

彼がそう言うとき「ぐぬぬ……」という声がスピーカー越しに聞こえてきた。

「それで、目的地まではどのくらいなんだ？」

アルトの質問にシャロが応える

「地図だとあともう少しで拠点キャンプにつくはずなんだけどな」

「了解」

アルトはフットペダルを踏み込み、機体を前進させながら二日前の出来事を思い出した。

二日前

荒々しい騒ぎ声と立ち込める酒と料理の匂い。「酒場バビロン」は今日も戦士達が集う憩いの場だった。

「バーベキューセットとビール、お待たせしました!」

この酒場のウェイトレス「ハヤ」が巨大な皿とビールを持って男たちの前に置く。

ライン連邦出身の彼女はここに来て間もないものの、必死さに満ちた笑顔と煽情的なバニー姿で瞬く間にこの店の人気者になった。

「ハヤちゃん今日も似合ってるね!」

彼女の風貌に鼻を伸ばした男が新しく持ってきたビールを受けとる。

「ありがとうございます!」

男の真意を知らない彼女は天真爛漫な笑顔で礼を述べてカウンターに戻って行った。

「女将さん、七番テーブル出してきました!」

カウンターの前で料理の盛りつけを行っていた女性がハヤを見る。ブロンドの髪が耳から垂れ、耳にかけた金色のリングが揺れた。

「ありがとう、ハヤ。戻って早々悪いのだけれど、十番テーブルまでこれ運んでくれないかしら?」

彼女の名は「ヴァネッサ」酒場バビロンを経営する優美なる主人。

この酒場に来る人間のほとんどは彼女目当てにやってきていると言っても過言ではない。彼女は傭兵や賞金ハンターなどの良き理解者であり、母でもある。寂れた傭兵たちは彼女の妖艶な魅力に今日も溺れるのだろう。

「はい! 行ってきます!」

銀色のトレイに乗った料理を受け取ったハヤがカウンターを出ていく。賞金ハンターのアルトは彼女の持つ料理を恨めしそうな目で追った。

「腹減ったな」

カウンターにアルトは突伏す。獣の唸り声のような音が腹の辺りから聞こえてくるのを彼は自分の耳で聞いた。

「大丈夫？ 坊や」

優しい声に顔を上げるとヴァネッサが自分の事を見つめているのに気が付いた。

「あ、いや、気にしないで」

彼はその場から起き上がると顔を赤くしながら両手を振るが、腹の獣はどうにも素直らしい。

グルグルと呻きを上げた自分の腹に彼は更に顔が赤く染まる。

「ご飯、食べてないの？」

ヴァネッサから心配そうな声が出る。アルトはその言葉に小さく項垂れた。

「……最近、ロクな依頼をこなしてないからそろそろ金が……」

そう言っただけは財布を逆さに振って見せる。しかしそこから出てくるものは何も無かった。

「あらあら、それは大変。ちょっと待っててね」

そう言っただけヴァネッサはカウンターの下に潜ると一枚の皿を差し出した。

「余りもので良かったら食べて」

そこに乗っていたのは食欲をそそる色鮮やかなサンドイッチだった。

「俺に？ でも、いいの……？」

アルトは皿と彼女の顔を交互に見る。

「今回はサービス。だからまた来て頂戴ね」

そう言っただけヴァネッサは小さくウインクをしてみせた。

「ありがとう！」

アルトは言うと同時にサンドイッチを頬張った。

「……美味しい！」

パン、レタス、トマト、ハム。様々な食材が彼の味覚を刺激する。「こんな美味しいサンドイッチ食べたのは初めてだよ！ ありがとう」

そう言いながら彼はもう一口を頬張る。それを見てヴァネッサはクスクスと笑った。

「それは良かったわ。次来た時にはもつと美味しいものをぐっ馳走させてね?」

彼女はアルトを優しく見つめるとカウンターの奥に戻って行った。

「美味しかった……次はどっちにしようかな」

さらに残ったサンドイッチを見る。残っているのはタマゴサンドとカツサンドの二つ。

「迷うな……」

彼の右手が右と左を交互に行き交う。

「よし、ここはカツサンドに——」

「アルトー、いくつか依頼探してきたよー」

店の奥から彼を呼ぶ声が聞こえてくる。

赤色の髪を揺らしながらシャロが依頼の束を抱えてやってきた。

「あれ? なにその美味しそうなサンドイッチ」

シャロがアルトの目の前にある皿を見る。

「ああ、これはさつき女将さんから貰ったサンドイッチ」

「なにそれズルい! 私にもよこせ!」

そう言っただけ彼女は素早い手つきで彼の皿からカツサンドを奪い取った。

「あつ……」

アルトが何かを言うよりも早く、カツサンドは一口に彼女の胃袋の中へと消える。

「美味しかったあ!」

満面の笑みを浮かべる少女、その目の前でアルトは人生で五番目くらいの絶望を負った。

「俺の、カツサンド……」

再び彼の顔が項垂れる。

「でもまだ俺にはタマゴサンドがあ……る?」

伸ばした手の先にタマゴサンドは無かった。

「んー! こっちも美味しい!」

シャロの頬に卵の欠片付いていた。

「それで、どんな依頼持ってきたんだよ?」

未だに不貞腐れた顔のアルトがシャロの持ってきた依頼書に目を通す。

悪党退治から失せ者探し。賞金ハンターの依頼は多岐にわたる。もちろんその難易度に応じて報酬額というものは当然変わってくる。

「なんかないかなあ、割のいい仕事……」

シャロが小さく溜め息を吐き出す。

「そんなのそう簡単に見つかるわけないだろ」

アルトは依頼書にパラパラと目を通すがめぼしい依頼は見つかりそうにない。

「ねえアルト、これなんかどう？」

シャロが差し出した一枚の依頼をアルトは見つめる。

「チャバ砂漠に潜伏するテロ組織の残党狩り？」

「そう！ それに見てよこの報酬額！」

少女が報酬金額を指差す。アルトはその額を目で追った。

「報酬額が、二百万!？」

アルトは依頼書の馬鹿げた報酬額に目を見張る。見間違いかと思いい二、三度確認するがその数字に偽りは無かった。

「二百万って、これだけあれば三人分の機体の整備代を差し引いてもお釣りがくるぞ……」

「ねえ、これ受けようよ！ これだけのお金があればこれからの生活が楽になる！」

シャロはうずうずと体を震わせている。

「ちよつと待つてシャロ、でもこれ変だよ。残党狩りをするだけでこんな大金が入って来るなんて普通ありえる？」

アルトは怪訝そうに依頼書を睨んだ。

「なんか、裏がありそうな気がするよこれ」

アルトの意見にシャロが口を尖らせた。

「じゃあアルトはお金が欲しくないの？」

「お金はそりゃ欲しいさ。でもこれは……」

言い淀むアルトにしびれを切らしたシャロが彼の手から依頼書を奪い取った。

「ねえアルト、それにここを見て」

依頼書の概要欄をシャロが指差す。アルトはその文章を読み上げた。

『このまま彼らを野放しにしておけば、近隣の村に略奪などの大きな被害をもたらすかもしれない。だから一人でも多くの力を貸してほしい』

文章を読み終わりシャロの顔を見る。その細められた瞳からは怒りと、悲しみが入り混じった感情が読み取れた。

「……行くだけ行ってみようよ。もしそれで危険だとわかったらすぐ逃げる。これでどう?」

アルトは目を閉じて小さく溜め息を吐き出す。こうなると彼女は意地でも意見を曲げないことをアルトは既に理解していた。

「わかったよ、行こう」

その言葉でシャロの顔に明かりが灯る。

「ありがとう! アルト!」

そう言つて彼女はアルトの手を取った。

「それで、それはいつまでに集合するんだ?」

シャロが依頼書を見る。

「えっと、集合は二日後だね」

「二日後?!」

あまりの驚きにアルトの声が若干裏返った。

「ここからチャバ砂漠までどれだけあると思ってるんだよ! 急いで機体の整備するぞ!」

アルトとシャロは慌てて酒場のドアをくぐって出ていった。

「また来てね〜」

ヴァネッサの優しい声が彼らの背中に向けて送られた。

2話

「あ、見えてきたよー!」

シャロの声でアルトは意識を現実に戻す。機体の前方、幾つもの大きなテントが砂漠の真ん中に建ち並んでいた。

アルトはその場所に目を凝らす。キャンプと共に何台ものBMがキャンプにできた簡素な駐機場に止まっている。

二人はキャンプに入ると停止したBMの列に自分たちの機体を並べた。

「私、本部の方に参加申請出してくるからアルトはここで待ってて」

シャロは機体から降りると本部のあるテントに向かって歩いて行く。アルトはその後ろ姿を見送るとアイアンヘッドLGの脚部に背中を預け、空を仰いだ。

「チャバ砂漠……か」

火花を散らす鋼鉄、命の焼け焦げる臭い。未だにあの時の感触は自分の中に深く残っている。それでも少年は己の過去と決別した。新たな一歩をシャロと、エレナと共に歩みだすための決別を……

「した、はずだったんだけどな」

しかし、彼は再びこの場所に戻ってきた。時の流れが全てを風化させるこの乾いた砂漠に。

アルトは目を閉じる。薄い紫の髪、幽霊のように白い肌。熱い瞼の裏に一人の女性の姿が映し出された。

「余計な事まで……」

息を吐き出す。熱い吐息が熱波に溶けて消えた。

足音が聞こえてくる。一瞬シャロが戻って来たかと思ったが足音は彼女が向かったのとは反対の方向から聞こえてきた。アルトは浮かしかけた腰を戻し俯いた。

彼の目の前を足音が通り過ぎる。その気配が記憶の中にいる女性と無意識に重なった。

「えっ……っ……」

徐に顔を上げるアルト。しかしもうそこに人の姿は無かった。周

困を見渡す。シャロがこちらに向かって急ぎ足でやって来るのが見えた。

「申請取れたよ！ って、どこ見てんの？」

「ううん。なんでもない」

アルトは首を横に振り、頭の片隅にあるまやかしを振りほどいた。

(感傷に浸りすぎだ……)

寄りかかっていた背中を離す。彼は体を伸ばして意識を切り替えた。

「あら？ そこにいるのはちんちくりんとそのお供じゃない」

ふと目の前からどこかで聞いたことのある声がする。シャロは反射的に顔を顰めた。

「松ぼっくり！」

「私の名前は曦夜^{シヤ}^アってずっと言ってるでしょ！ 松ぼっくりはこつち！」

そう言っただけで彼女の頭から一頭のリスが顔を出した。

目の前に現れた小柄な少女の名は「曦夜」アルト達と同じ賞金ハンター。どういうわけかシャロをライバル視している。

「なんでアンタがここにいんのさ！ ていうか今私のことちんちくりんって言ったでしょ！」

シャロが曦夜を睨みつける。曦夜もシャロを睨み返した。

「ちんちくりんはちんちくりんでしようが！ 私は間違ったことは言っていないわよ」

「まあまあ、二人とも落ち着いてよ」

アルトがシャロと曦夜の間に入って入る。二人は睨み合いながらもその場は引いた。

「曦夜もあの依頼を見てここに？」

アルトの質問に曦夜は首を縦に振った。

「そうよ、あれだけの報酬があれば私の機体をもっと強くできるもの」

曦夜はそう言った後きよろきよろとあたりを見まわした。

「そう言えば最近増えたあの白髪のお姉さんが見当たらないけど？」

シャロは少し考えたあとポンと手を叩いた。

「エレナのこと？　彼女は私達より腕が立つから今は別の依頼をこなしてもらってる」

「エレナ」は先日、とある事件をきっかけにアルト達の元にやってきた一人の女性。昔は高名な騎士だったそうだが今は何故か彼等の従者として行動を共にしている。

「それって安易に自分たちが弱いって言ってない……？」

「そんなことないわ！　少なくともアンタなんかより私の方が強いわよ！」

「何を！」と喧嘩腰になる二人をアルトが再び治める。

「とりあえずキャンプでご飯にしない？　みんな腹減ってるだろうし」

半ば強引に二人を説得しアルト達は食料の配給所に入った。

配給所の中は人でごった返していた。下品な騒ぎ声と稚拙な会話、鼻がもげそうになる悪臭がテントの中に充満している。慣れない人間ならばそこで息をすることはおろか、目すら開けていられないだろう。

アルト達はその悪環境を気にもせず食事を受け取り、空いたテーブルに座った。

「人が多いわねえ……」

曦夜が頬杖つき鬱陶しそうに周りを見た。

「みんな今回の報酬が目当てなんだよ。あれだけの金額ならみんな喉から手が出るほど欲しいはずだろうしね」

アルトはポテトサラダのような何かをスプーンで掬い上げると口の中に入れた。

口に入れた瞬間、それは口の中でぐじゅりとくずれて胃の中に納まる。

お世辞にも美味しいと言えないそれを全員が顔色一つ変えずに食べる光景は映画で見る刑務所の食事の様だった。

「その君たち、少し相席させてもらってもいいかな？」

通路から男性の声が聞こえる。アルトが顔を上げると一組の男女が立っていた。

その男は長い金髪の髪を後ろで結わえ、腰には二丁のリボリバーを下げまさにガンマンという言葉が似合う。

「ああ、どうぞぞ」

アルトは手でジエスチャーを送る。二人はアルト達三人の目の前に座った。

「すまないね、どこも人ばっかでロクに座れそうな場所が無くて」

男は飄々とそう言って笑った。

「アンタ達も賞金目当てにこの依頼を？」

男はアルト達にそう訊ねる。アルトはその問いに頷いた。

「ええ、そう言うあなた達は企業の間人ですか？」

『O. A. T. H』と書かれた腕章が二人の腕に巻き付いている。

今度は男が頷いた。

「そ、俺達は傭兵派遣会社O. A. T. Hから来た傭兵さ。俺の名前はカルシエン、んで俺の隣に居るのが上司のフリーズ」

カルシエンと名乗った男が隣を指差す。真つ赤な長髪と右目に装着された眼帯の女性「フリーズ」はセルリアンの瞳でアルトを睨みつけた。

「何見てんだ、あ？」

ドスの利いた声がアルトを刺す。アルトは全身を強張らせると首を全力で横に振った。

「い、いいえなんでもないです……」

「やめなよお嬢、三人ともビビってる」

カルシエンがフリーズの肩を抑えた。

「すまないね、彼女昨日はちよつと呑みすぎたみたいで調子が——イデデデ！」

彼の足がフリーズのブーツに踏みつけられる鈍い音がテーブルの下から聞こえてきた。

「余計なことを言うんじゃない」

そう言って彼女は頬杖をついて盛大なため息を吐いた。

「せめてエイルがいりゃあ薬の一つでも貰えたのに……」

「しょうがないさ、彼女は今献血スタッフの手伝いに行ってるんだから」

そう言いながらカルシエンは料理を口の中に入れた。

「にしてもマズいな、ここのメシは……」

カルシエンは一口ごとに顔を顰める。

「帝国のメシに引けをとらないマズさだ」

その一言に曦夜の眉が小さく跳ねた。

「あなた、ブリテン人？」

彼女の問いかけにカルシエンが曦夜を見る。

「さて、どうだろうね」

彼はそう言っ言葉をはぐらかし、二人はしばらく見つめ合った状態で沈黙した。

「……スターゲイジーパイ」

曦夜がぼそりと呟く。カルシエンの表情が一気に強張った。

「メシの最中にその話は止そう」

明らかに嫌な顔をする。相当辛い思い出があるようだ。

「そうね、自分で言っておいてなんだけど、あまりいい気分にはなれないわ」

彼女も自嘲気味に目を俯かせ、二人はそう言っ食事に戻った。

「そう言えば君たちは見たところ賞金ハンターみたいだけど、チームなのかい？」

カルシエンが尋ねるとシャロがブンブンと首を横に振った。

「たしかに私はアルトとは組んでるけど、こいつとなんか組むわけない！」

シャロが指を曦夜に向かって差す。それを見た曦夜が眉間に皺を寄せる。

「当然よ！ 私をこんなポンコツ二人と一緒にしないでほしいわね！」

アルトを間に挟んで睨み合う二人。アルトは今日何回目かのため息を吐き出した。

「二人とも、やめな——」

二人を諫めようとした瞬間、彼らの反対側で食器の激しく落ちる音がした。

「テメエ！ 女だからって調子に乗ってるんじやねえぞ！」

テント中の視線がその声に注がれる。男が立ち上がり隣の人物に向かつて怒鳴り散らしていた。相手は女性のようなだが座っているせいか姿を捉えることはできない。

女性が立ち上がる。白く透き通った肌と端正な顔立ちがこの薄汚れたテントには異質でやけに目立った。

「ビュー」

カルシエンが口笛を鳴らす。女性が肩にかかった紫の髪を指で鋤き、目の前の男を冷ややかに見つめた。

「別に、あなた達と行動するつもりはないわ。寧ろ邪魔よ」

抑揚のない声が冷気を纏ったかのように空気をピリピリと危うくする。男がピクピクと片方の眉を小刻みに震わした。

「邪魔だど？ このA級ライセンス持ちの俺が邪魔だど？」

目の前の女性に邪険にされたことが余程頭に來たのか男の震えは全身に回っていく。

「ええ、少なくとも自分の階級をひけらかす程度の相手と組む気はない」

女性が身の丈ほどもある巨大な対B M用ライフルを担ぎ上げた。

彼女は男に背を向けてテントを出ようとする。

「止まれ！」

テント中に男の声が響く。外に向かつて歩いていた彼女の足が止まった。

「なに？」

視線だけを男の方に向ける。彼女の眼の前に一丁の拳銃が突きつけられていた。

「散々人のこと馬鹿にしやがって！ ムカつく女だぜ！」

男の手は怒りに震え、引き金にかかった指は撃つことにためらいはないことが窺える。対して目の前の女性はそれに怯えている様子は無い。

「止めないとー！」

シャロがその場に立ち上がる。それを曦夜が引き留めた。

「もう間に合わないわよ！」

「問題ねえよ」

フリーズが吐き捨てるように呟く。シャロと曦夜がフリーズの顔を見た。

「そこまでにしときな」

男の後ろからカルシエンの声が聞こえる。いつの間にか彼の姿が四人の前から消え、男の背後を取っていた。

「いつの間に!？」

曦夜が彼と椅子を交互に見る。

「たく、あのキザ野郎……」

フリーズが面倒臭そうに舌打ちをした。カルシエンが男の背中にリボルバーを突きつける。

「落ち着けよおっさん」

男は目を血走らせ、今度はカルシエンを睨んだ。

「誰だよテメエ、邪魔すんな！」

怒鳴られたカルシエンは呆れた顔でテントの屋根を一瞬見つめると小さく溜め息を吐いた。

「その銃、マガジンが抜けてるぜ」

男が驚いて自分の銃を見つめる。その銃のグリップ下部に不自然な空洞が開いていた。いつの間にかテントから出ようと歩いていた女性をカルシエンが引き留める。

「そのレディ、アンタだろ？ この銃から弾を抜いたのは」

彼女は一度立ち止まると右手でマガジンを揺らして見せる。

「いつの間に……!？」

男は啞然と彼女の指の間で揺れるマガジンを見つめた。男の戦意が無くなるのを確認するとカルシエンは銃を自分の腰に収める。

「見事な腕前だな。どうだいレディ、俺達と組まないかい？」

カルシエンがその背中に声をかける。

「興味無いわ」

先程同様、彼女は冷たく言い放つとマガジンをその場に捨ててテントを出ていった。

「……フラれたな」

そう言つてカルシエンは肩を竦める。慌ただしかったテントの中に静寂が訪れた。

「びっくりしたあ……」

シヤロが安堵の息を吐く。曦夜も騒動が治まったことに胸を撫で下ろした。

「すごかったね、あのカルシエンって人。いつの間に移動したんだろ？」

アルトに話しかけるが彼の視線はあの女性がいた場所から目を離せないでいた。

「なんで……」

アルトが重々しい声で何かを呟く。

「アルト？」

彼の言葉に首をかしげるシヤロ。すると突然アルトが立ち上がり、テントを飛び出した。

「どこ行くの!?! アルト!?!」

アルトはテントを出て、さっきの人影を探す。駐機場に向かうその後ろ姿を彼の視界が捉えた。

「待て!」

遠くなつていく背中を呼び止める。その声に流砂の傭兵「テレサ」はゆっくりと首を後ろに回して目の前の少年を見つめた。

二人の視線が交錯する。この時アルトは確信した。忘れるはずがない、忘れられるわけがない。その姿を、その顔を、その瞳を彼は今でも憶えている。

この砂漠で起きたあの日の事を。

「なんで、なんでアンタがここにいるんだ!」

女性はしばらくアルトの顔を見つめた後、静かに言葉を放った。

「私達、どこかで出会ったかしら?」

女性は再び背を向けて歩き出す。アルトはその場から動けずに彼女の姿が視界から消えるまで、ただ見つめている事しかできなかった。

3話

「アルト！… ねえアルトってば！」

どのくらいその場に立ちつくしていたのだろうか。シャロの声でアルトは意識を取り戻した。

「あっ……シャロ？」

固まっていた筋肉が徐々に動きを取り戻し、掠れた声で少女の名を呼ぶ。

「さっき急に飛び出したと思ったたら今度はここに立ち止まって、なにかあったの？」

アルトはさっきまで女性のいた場所を見つめる。そこに人の姿は無く、蜃気楼が揺らめいていた。

「なんでもない、昔の知り合いに似ていたから追いかけただけだよ」

アルトは首を横に振り、少女に微笑みかける。シャロはアルトの顔を弱々しく見つめたがすぐに笑顔を見せた。

「そっか！ アルトがそう言うなら信じるよ。それよりそろそろ合同ミーティングの時間だから急ぐ！」

先に走り出したシャロを追いかけてアルトも歩きだす。しかし彼の脳裏からあの姿が消えることは無かった。

密集したテントの中央、その開けた場所がミーティングの会場だった。シャロとアルトがそこに着く頃には多くの参加者達が空気を埋め尽くすように並んでいた。

「二人とも、こっち！」

群衆の中から声がある。その声の位置を辿るとピョンピョンとウサギのように跳ねる曦夜が参加者の群れの中にいた。

曦夜の声に先導されながら二人は人の波を掻き分ける。

「何やってたのよアンタら、いきなりテントから飛び出して」

彼女のそばまでやって来ると曦夜が口を尖らせた。

「昔の女にでも会ったかい？」

そう尋ねてきたのは先程の争いを鎮めたためたカルシエンだった。

「カルシエンさん、一緒にいたんですね」

カルシエンはアルトの言葉に「ああ」と応えると小さくウインクをしてみせた。

「それで、彼女とはどういう仲なんだ？」

アルトとカルシエンの視線が交わる。しばらくその状態で見つめ合った後、アルトは首を横に振った。

「ただの人違いでしたよ」

「……そうか、随分な美人だったんで紹介してもらおうかと思ったんだがなあ」

そう言つて彼はやれやれと首を横に振った。

「あの手の女は大抵ロクな女じゃないね」

がしがしと自分の髪の毛を掻きむしるフリーズがカルシエンの後ろからやつてくる。

「ああいうヤツは関わった人間を全て不幸にする。そのクセ自分だけは飄々と生き残るからタチが悪い」

「まるで死神さ」そう言つて彼女は欠伸を漏らす。

「なんだいお嬢、あのコの可愛さに妬いたかい？」

「オンナのカンつてやつさ。それとカルシエン、今後背中に気を付けない」

(死神……)

その言葉のおさまりの良さにアルトの頭の中で二文字の単語が反芻する。そのイメージは鋼鉄の巨人となってアルトの背筋に悪寒を走らせた。

「アルト、顔色悪いけど大丈夫？」

シャロがアルトの顔を覗き込む。

「うん、平気だよ」

シャロの顔に笑つて見せる。頬を垂れた一筋の汗は砂漠の熱にしみ出ただけだろう。

不意に周囲の喧騒が止む。その場にいた全員の視線がある一点に集中した。

木箱でできた簡素なステージの壇上に一人の男性がいる。

小綺麗に整えられたワインレッドの燕尾服がここにいる誰よりも

その男の格式が高いことを示していた。

「それでは、ミーティングの方を始めさせていただきます」

男がマイク越しに声を張る。

「まず最初に自己紹介を。私は今回の依頼人で商人のエドワード・カーターと申します。皆様、本日は御集まりいただき誠にありがとうございますでございます」

エドワードと名乗った男が深々と頭を下げた。数秒の後、エドワードはもう一度顔を上げ再び喋りはじめた。

「既に依頼書の内容にも書いてあるかと思いますが、最近このあたりでは敗残したテロ組織が徒党を組み、付近の村々を襲っているのです！ そのせいで村人達は食料はおろかまともに眠る場所すらありません！ 私はこの惨状に憤慨しその組織を壊滅させるため、皆さんの募集をかけたのです！」

彼は拳を胸の前で握りしめ大声量の演説を行う。それを一人の声が遮った。

「なあエドワードさんよ」

集団の中から声が響く。エドワードは自分の演説を中断し声の方に向き直った。

「はい、なんででしょうか？」

声の主は先程テレサに銃を向け、醜態をさらした男だった。

「大変素晴らしい演説はありがたいんだがな、俺達が聞きたかったのはそんなことじゃあねえんだ。金だよ、報酬の二百万！ あれは本当なのかよ？」

その男の言葉に群衆のあちこちから声が上がりがり始める。

「そうだ！俺達はそれが目当てで集まったんだ！」

「ちゃんと二百万払ってくれんだらうな!？」

騒ぎは次第に大きくなり、収集が付かないほどに膨れ上がった。

「ハッ、どいつもこいつも意地汚ねえサルだな」

フリーズが尖った犬歯を見せながら騒ぎを嘲笑する。

止まない質問と罵声が降りかかる。彼はたじろぎもせず、徐にスタンドにかかっていたマイクを取り外した。

「御静粛に！」

男の覇気のこもった声が砂漠に響き渡る。その一言に数十もの声がピタリと止んだ。

「私とて商人の端くれ、物事を円滑に進めるのに最も都合が良いのがお金だということは百も承知しています。皆様がこの莫大な報酬に不信感を抱くのも当然でしょう。しかしご安心ください、成功報酬の二百万Gに嘘偽りは一切ありません！そしてこれは今回のミッションを達成した方全員にお渡しさせていただきます！」

その言葉に今後は全員がどよめく。

「達成者全員に二百万!？」

「正気かアイツ？」

「ちやんと金が貰えるならなんだっていいさー！」

動揺と歓喜、二つの感情が会場に立ち込める。

「私の覚悟、これで伝わったでしょうか？」

エドワードは男と視線を合わせる。

「へっ、金さえ払ってくれるならこつちも文句はねえよ」

男は冷や汗を浮かべながら言葉を返した。

すっかり静まり返った群衆を見渡し、エドワードは再び喋りはじめた。

「皆様にも納得していただいたようなのでここから本作戦の概要を説明させていただきます。」

彼の背後に黒板とチョークという前時代的な道具が置かれる。その黒板にチョークを走らせながらエドワードは説明を始めた。

「今回の作戦の目標はここから西に向かった場所にある残党組織の拠点、この壊滅が本作戦の達成条件となります。敵の具体的な数は不明ですが様々な勢力がまとまっているはずなので大規模とと思っています。ただきたい」

エドワードは黒板を巧みに使い、必要な情報を提供していく。

参加者は彼の作戦を茫然と立ち聞いていた。

「なお、この作戦は長距離の移動、および変則的な戦闘が予想されるため、一定間隔で中継キャンプを設営します。ここでは弾薬や食料の補

給、戦闘不能になったパイロットの受け入れを行います」

「なにか質問は？」と訊ねるが全員が呆気にとられ言葉は返ってこなかった。

「では作戦の開始は一時間後、目的地への移動手段は各人にお任せいたします。皆様、ご武運を」

そう言つてエドワードは壇上を降りてテントの中に消えた。

一瞬、場が静まり返ると今度は慌ただしく一斉に動き出した。意気揚々と機体の下に向かう者、今から賞金の使い道を考え笑みを抑えられない者。多種多様に別れた彼らの目は一様に鋭くギラついた光を宿していた。

「さて、俺達も行くかね」

カルシエンがその場から離れようとする。

「あら、あなた達は一緒にいかないの？」

曦夜が首を傾げる。

「ぞろぞろと何人も引き連れて歩いてたら敵的にしてくださいって言つてるようなモンだろうが」

スゴみのあるフリーズの声に曦夜が小動物のように跳ねた。

「そ、それもそうね」

曦夜は強がりながら彼女の言葉に納得する。

「ま、敵同士つてわけでもないんだ。君たちがピンチに陥ったら俺達が助けに行くよ」

そう言つて二人は駐機場に向けて歩いて行った。

「それじゃ、私たちも行くこうか」

「うん」

シャロの言葉にアルトは頷く。アルトは曦夜を見ると声をかけた。

「曦夜、君はどうする？ 僕らと一緒に来るかい？」

「はあ!？」という声はシャロから出た声だった。

「なんでコイツも一緒に!？」

アルトはこめかみを掻く。

「なんでって、さすがに一人じゃ危ないだろ。だから——」
「結構よ」

曦夜がアルトの言葉を遮る。彼女が首を横に振った。

「さつきもあの傭兵が言ってたでしょ？ 集団で固まりすぎるとかえって敵に狙われやすくなるって」

「それは、そうだけど……」

アルトが言葉を濁す。

「それに私は元々一人でやるスタイルなの。慣れないことやってハマしたくないしね」

そう言って彼女もこの場から去って行った。

「なんだよアイツ！ せつかくアルトが善意で誘ったって言うのに行こー！」

頬を膨らませながらシャロがアルトの手を引く。

「行くから引つ張るなって！」

シャロに手を引かれながらアルトは周囲に目を凝らす。しかしそこに彼探した人物の姿は見当たらなかった。

壇上を降りたエドワードはテントの入り口をくぐる。

愚かな人間ほどわかりやすい報酬を提示すればそこに真っ先に飛び込む。しかし愚かゆえに無意味な問答をしなければいけないのは非常に手間だ。

彼は額に浮かんだ汗を拭いながらそんな感情を短い溜め息に乗せた。

「やっぱ金持ちは言葉を捏ね繰り返すのが上手いねえ……」

嘲笑するような男の声がテントの陰から聞こえる。彼の顔からはさつきの紳士さが消え去り、侮蔑するような瞳が陰に向けられた。

「なんだ、貴様も来ていたのか」

陰に向かって彼は言葉を投げる。影は「ケツケ」と耳障りな笑い声をあげた。

「そんな顔で睨まないでくれよ旦那、アンタの邪魔はしねえし任せられた仕事はするよ」

「そうでなくては困る。でなければ私があの子を参加者側で雇った意味がないからな」

エドワードはそう言いながらテントの奥に歩いて行く。しかし彼

は一瞬立ち止まるともう一度陰の方を睨んだ。

「失望させてくれるなよ、『流砂』の傭兵……」

それだけ言い残すと彼は今度こそテントの奥に消えた。

「はいはい」

雑な返事の後、ゆっくりと陰の中から影が現れる。

影は喉を鳴らして小さく笑った後、鋭い双眸を光らせた。

「待ってろよテレサ、テメエは俺が殺しに行くから……」

memory and fire

1話

——ヤツらは「戦場の背景」だと思え。もう考えるな。

——死んだヤツらはただの「死亡報告の数値」として処理しろ。

——すべての命を背負い込むような真似はやめろ。

『……一人でもいい。生きて、俺にその命を背負わせてくれ……!』

——行って、お前自身の生き方を考えろ!

『俺は決めたんだ! 俺は、俺のやり方で生きてやると!』

鉄と血と、紅く燃え盛る炎。記憶の中で揺らめき、その炎は少年の心を灼く。

暗いコクピットでネオンのように計器が明滅する。

「……隊長」

赫々と燃えながら遠くへと流れていく走馬灯にアルトは一人呟いた。

「ん? なにか言った?」

シャロの声でアルトは我に返る。彼は俯かせていた顔を上げた。

「いや、何も言っていないよ」

顔も見えない相手に首を振り、アルトは自分の音声を切ると重い溜め息を吐き出す。

作戦が開始されてから一時間、彼の心は濃い霧に覆われていた。何度も甦るあの日の出来事。記憶の奥底から浮かび上がっては霧散し、その度に彼の心は更に曇る。

この砂漠の熱に当てられたのか、それとも因縁めいた出会いが自分の心を曇らせるのか、それを確かめる術を少年は持ち合わせていなかった。

「そこそこ進んだはずだけど、敵の気配が全然ないね」

シャロのアイアンヘッドSが首を左右に振って索敵する。アルトも周囲を調べるが依然として風が静かに巻き上げた砂以外、この枯れた世界に動きはなかった。

「それは多分、順調に進んでるってことだよ」

アルトは固まった肩の筋肉をほぐしながらマイクに向けて話しかける。

「なるほど、つまりシャロ様のルート作成は完璧だったということね！」

少女の得意げな笑い声がスピーカーを通してアルトの耳に入ってきた。

「まあ、それはそれとして……」

シャロが眉を顰め頭上を見上げる。

「なんであんたまで一緒にいるのよ！ 松ぼっくり！」

曦夜の駆る戦闘用飛行機、ブロードソードが二人を見下ろすように上空を飛んでいた。

「アンタさつきカツコつけていなくなったクセに、なに全く同じルート来てるんだよ！」

シャロの口ぶりに腹を立てたのか、無線越しに曦夜の声が聞こえてくる。

「うるさい！ アンタらが私のルートと被ってたんでしようが！」

アルトはさつきとはまた別の意味でため息を吐き出した。

かれこれ三十分はこの二人の不毛なやりとりは続いている。最初の方は仲裁に入っていたアルトだったが段々とその無意味さに気が付き、途中からは口をだすことすらしなくなっていた。

「なにがこうもあの二人の仲を悪くさせるんだ……？」

アルトはスピーカーから流れて来る二人の声から意識を離すとリーダーを起動し、周囲を注意深く見渡した。

いくら順調に進んでいるとはいえ、警戒は怠れない。まして相方がこの有様では彼がより神経をとがらせるほかなかった。

ジツトリと重たい汗が頬を伝う。安物の冷暖房ではどれだけ温度を調節してもできることには限界がある。

首筋を伝った汗を腕で拭う。ひたすらに熱を溜め込むコクピットの中はさながら蒸し器のようで、その中に入った彼はいわば蒸し上げるのを待つだけの饅頭と言えるだろう。

「だからなんで松ぼっくりはいつもアタシに絡んでくるのさ！」

「なんでって、アンタは私のライバルだからに決まってるでしょ！」

絶えず二人のいがみ合いが聞こえてくる。彼女達の声を聞いているだけで室温が一度か二度高くなっているように彼は感じた。

(まだ続いてたのか……)

アルトがいい加減に二人をなだめようとマイクのスイッチを入れた瞬間……

——ドンッ！

三人のすぐ後方に着弾音と巨大な砂の柱が上がった。

すぐさま三機はその場から離れると再び集合し、互いの背中を庇いながら武器を構える。

「アルト！ 索敵！」

先程まで喧嘩をしていたとは思えないほど冷静な声でシャロはアルトに指示を送った。

「もうやってる！」

シャロの言葉が届くよりも前にアルトはレーダーを起動し最大範囲で熱源を探す。明滅するレーダーに三つの紅点が映し出された。

「見つけた！ 十一時の方向！」

アイアンヘッドLの緑色のカメラアイが砂漠の小さな砂丘を睨む。他の二人も彼と同じ方角を見つめる。

砂丘の上に四機のフェネックが彼等を見下ろしながら立っていた。数瞬の睨み合い、その直後フェネックが動き出した。

「来る……！」

機関銃を放ちながら砂丘を駆け下りる三機の機体。三人は再びその場から散開した。

一機のフェネックがアルトの後を追いかける。

「こつちに来たか！」

アルトはランスガンを後方に向けて照準を合わせると弾丸を放つ。黒鉄の鉄球が黄色の装甲とぶつかり合い、火花を散らしながらその巨躯をよろめかせた。

その一瞬を見逃さなかったアルトはすかさず機体を百八十度回転

させ、ランスガンを構えて突進した。

フェネックの機関銃が彼に向かって浴びせられる。アルトは姿勢を低くすると左右に動く。無数の弾丸は青い軌道を空虚に貫くだけで彼の装甲が傷つくことは無い。

次第に狭まる両者の距離、アイアンヘッドの射程に入った瞬間、アルトは砂を蹴り上げて飛び上がった。

黄色の機体の真上に丸い影、その右手に持った得物の切先が獲物の姿を捉えた。

アイアンヘッドの体が重力に従い、敵めがけて落下する。

「はあああ！」

落下の勢いそのままランスガンを敵の背部に突き刺す。一本の巨大な槍がフェネックの装甲を突き破り、機体の動きを完全に停止させた。

荒くなった呼吸を整え、突き刺さった武器を引き抜く。

「捕まえれば敵の情報くらい聞き出せるかもしれないな」

アルトはコクピットハッチに手を触れると接触通信を開いた。

「おい、フェネックのパイロット聞こえるか？」

中のパイロットに向かって呼びかけるが返事は返ってこない。何度が同じように声をかけるが結果は変わらなかった。アルトは面倒臭そうに自分の額を搔く。

「機体をこじ開けるしかないか」

アイアンヘッドの指が機体のハッチを掴む。扉を開こうとした瞬間、アルトは違和感に気が付いた。

「敵の機体温度が上昇してる!?!」

この状態での温度上昇、そこから導き出される答えを彼は一つしか知らなかった。

——自爆

その答えが脳裏をよぎった瞬間、彼の機体はその場を飛び退き左手の盾を正面に構える。それとほぼ同時にフェネックが爆散し、周囲の大气を轟音と共に震わせた。アルトは構えた盾を下ろし、立ち上る黒煙を見つめる。

「ただのA級機体が自爆だなんて……」

彼がかつて搭乗していたダガーシリーズはその嚴重な情報秘匿のためからA級機体でありながら機内に自爆装置が設けられ、徹底的に情報が隠匿される。

「でもこのフェネックは一般に流通しているものと変わらない、武装やパーツだつてどこにでもある普通のものだ。なのになぜ……?」

アルトはしばらくこの状況に困惑していたがすぐに頭を切り替えてシャロ達の下へ機体を走らせた。

アルトが機体を走らせ続けると橙色のBMと一機の飛行機が彼の目に映った。アルトはその二機の下に合流する。

「シャロ! 曦夜! 無事か!」

「こつちは大丈夫。二機は私達で倒したよ。アルトは怪我とかしてない?」

「こつちも大丈夫だ。それより二機? じゃあ残りの一機は……」

次の瞬間、彼らの下に弾丸が降り注いだ。

「何!」

射撃された方角を振り返る。一機の軍曹がマシンガンをこちらに向けていた。

「新手!? でも一機だけなら!」

シャロが武器を構える。

「馬鹿! 少しは周りを見なさいよ!」

それを曦夜が慌てて止めた。シャロが周囲を見渡す。

「な、なんなのこの数……!」

軍曹、チュートン、オデュッセウス、ヘルキャット。アルト達は大量のBMに囲まれていた。

「きつと逃した一機が仲間を呼んだんだ!」

「各企業の主力機体ばかりじゃない! 本当にコイツ等テロリストの残党なの?」

敵の武装が彼らを包囲する。

「逃げないと!」

シャロの声はこの状況に困惑し、震えている。

「こんな状況でどうやって逃げるのよ！」

オデュッセウスが懐から剣を引き抜く。他の敵も彼らに向けて武装を構えた。

「二人とも、来るぞー！」

ランスガンを構えるアルト。オデュッセウスが右手を掲げ一步を踏みこもうとした瞬間、黄色の閃光がその体を貫いた。

機体はその動きを止める。制御を失った機体は後ろに倒れ込み、轟音と共に爆散した。

「……」機目

暗いコクピットの中で静かにロックオンマークが動く。『撃墜確認』のシステム音声が遅れてやってきた。

2話

炎と黒煙を上げるオデュッセウスの残骸。眼前の事態に混乱しているのか周囲の機体も不自然に動きを止めていた。

突如訪れた刹那の静寂。それを再び走った黄色い閃光が破り、今度はヘルキャットのコクピットを貫く。

「……二機目」

その遙か遠方、腹這いでライフルを構えた機体のコクピットの中で一人のパイロットが慣れた手付きで排莖作業を行っていた。空いたライフルの弾倉に次弾を装填すると第三の的に狙いを定める。

「……三機目」

小さく言葉呟きながら彼女は静かに引き金を引いた。

「なんだ、これ……」

アルトは眼の前の景色に混乱していた。光が瞬くと次の瞬間には眼の前の敵が倒れ伏す。

一つ、二つと消えていくBMのライト。先程まで自分たちを襲おうとしていた大群は予測不能の事態に苛まれ、最早彼らのことなど眼中にない。

シャロと曦夜も現状に困惑しているようで指一本動かさずにその光景を見つめたまま身動きが取れずにいる。

逃げ惑う機体の中チュートンがふとその足を止め、ある方向に照準を定めた。

それと同時に生き残ったBM達が同じ方角に照準を定めると全員が武器を掃射する。雨霰と弾丸が降り注ぎ、小さな砂丘に巨大な砂塵が巻き上がる。一通り撃ち尽くすと全体が武器を下ろし、砂塵を睨んだ。

巻き上げられた砂煙が周囲に立ち込める。その一部が晴れたかと思うと二本の青白い閃光が敵の体を撃ち抜いた。

直後、砂塵の中を突き破って何かが飛び出した。逆光に包まれた影を全員が見上げる。

人の形をしたそれは彼らの頭上に現れるとバイザー状のカメラア

イが藤色の輝きを放つ。

人影が空中で腕を横に振る。一瞬何が空中に煌めいたかと思うとそれを眺めていた一部の機体が後方に倒れた。アルトは火花を放つ倒れた機体の頭部を見つめる。

「これは、ナイフ？」

機体の頭部に刺さっていたのは投擲用のナイフ。その刃がBMの頭部に深く突き刺さっていた。

「あの距離からここまで正確な投擲。一体何者なん……ッ！」

灼熱の太陽が上空に佇む機体を照らし始める。乙女のようにも見える細く美しい体が徐々に露わになっていく。アルトは徐々に剥がれていくその影から目を離す事が出来なかった。

残り少なくなつたBM達が次々に地面に倒れ伏す。ある機体は縦横無尽に動くドローンで蜂の巣にされ、ある機体は頭頂から一直線に打ち抜かる。またある機体はナイフにコクピットを突き立てられて停止した。

唯一生き残っていたチュートンが目の前に浮かぶ死神に向かつて機関銃を放つ。しかし弾丸は白い装甲を掠めることすらできずにその全てが空を切った。

獲物で遊ぶことに飽きた猫のように白と紅碧べにみどりで彩られた機体がゆつくりとライフルを構える。チュートンが銃口から逃げようと体を旋回させる。スラスタに火が灯った瞬間、その背中を黄色い閃光が貫いた。

まるで助けを求めるかのようにチュートンの右手がアルトのアイアンヘッドに伸ばされ、地面に倒れる。直後激しい爆音が大量の砂と機体の鉄片と共に周囲に巻き上がった。

宙に舞つた機体の破片と砂が重力に引かれ唯立ち尽すことしかできなかつた三人の頭上に降りかかる。アルトは限界まで開かれたその震える青い瞳に壮麗なる死神の姿を映していた。

上空に浮かぶ機体が高度を落とす、三人の視線が自然とそこに吸い寄せられていく。機体は足元で小さな砂塵を巻き上げると地面へと静かに降り立った。

アルトはコクピットのドアを開ける。機体から体を乗り出し、目の前に立つ機体を睨んだ。放熱と共に静かに佇んでいたコクピットハッチがゆっくりと開かれる。機体と同じ色の髪を風になびかせて彼女はコクピットの中から現れた。

乱れる前髪をテレサは人差し指で直す。眼下の少年を見下ろす。二人の視線が重なった。砂漠の風が熱を孕み、アルトの眼の前を吹き抜ける。しばらく睨み合う二人。

冷酷な視線が少年の心臓を狙う。アルトが咄嗟に腰の拳銃に手をかけようとした時――

「あなたが助けてくれたの？　ありがとう！」

一人の少女の声が砂漠に響く。アルトが振り向くとそこには手を振りながら近づいてくるシャロの姿があった。

「それにしてもあなたすごい腕前！　あの数を一瞬で倒すなんて――」

「勘違いしないで」

テレサがシャロの言葉を遮る。シャロの歩みが止まった。

「貴方たちを助けたわけじゃないわ。ただ行く手を阻む敵がいたからそれを排除した。それだけよ」

「ならなんで俺達を攻撃しなかった？」

アルトの言葉にテレサはその瞳を閉じると首を左右に振った。

「あなた達は私にとって大した敵として認識されなかったということよ」

淡々と言い放つ彼女にアルトは返す言葉もなく奥歯を噛みしめる。

その時、ディアストーカーが再び上昇し始めた。噴き上がるエンジンが砂漠の砂を巻き上げ、少しずつ地面からテレサの姿が遠ざかっていく。アルトはその姿を睨みつけていた。

上空に昇っていくディアストーカーからテレサの声が響く。

「もし次にあった時、あなた達を攻撃しない保証は無いわ」

そう言い放ち、テレサは飛び去って行った。

アルトは腰の拳銃から手を離すと重い息を吐き出す。彼の手は小刻みに震えていた。

灼熱の太陽が昇っていた砂漠もいつしか陽が沈み、夕闇が砂漠を支配し始める。アルト、シャロ、曦夜の三人は火を囲んで座っていた。焚き火の上には小さな鍋が吊るされている。鍋の中には真っ赤なスープが入っており、その中には鶏肉の塊がゴロゴロと顔を見せていた。

スープの状態を確認しつつシャロが満足そうに頷いた。

「二人ともお待ちせー！ シャロ様特製スープの出来上がりだよ！」

シャロがそれぞれの飯盒にスープを取り分ける。曦夜がシャロからスープを受け取った。

「特製スープって、缶詰めスープの中に鶏肉入れただけじゃない」

「文句あるなら、アンタにはもうやらないわよ」

シャロは自分のスープを手にとると口につける。アルトも飯盒の中身をスプーンで掬う。しかし彼の手はそれを口に運ぼうとはしなかった。

「……」

彼の脳裏に思い浮かぶのは昼間の戦闘の記憶。激しい戦闘音がまだ彼の耳の奥に残っている。

（俺達だけだったら勝てなかった……）

あの時、テレサが現れなければアルト達は今頃砂漠の中に埋もれていたことだろう。それどころかあの数の敵を誰の助けを借りることなくたった一人で壊滅させたその事実がアルトに強い衝撃を与えていた。

「どうしたの？ アルト」

ふと、横から聞こえてきた声にアルトは意識を戻す。シャロが不安そうな顔でアルトの顔を覗き込んでいた。

「口に合わなかった？」

「そんなことないよ、ちょっと考え事」

アルトはスープを慌てて頬張る。少し冷めたスープが口の中に流れ込んだ。すぐに次の一口を掬い上げ、口の前に持っていく。

「もしかして……昼間のこと？」

アルトの手が止まる。シャロは弱々しく笑い飯盒を胸元に抱えた。

「強かったよね、あの人……」

弱々しい声が炎をわずかに揺らす。曦夜が小さく頷いた。

「あの数の敵を一瞬で全滅させるなんて、あの女只者じゃないわ」

曦夜がスープを一口啜る。焚き火の炎が三人の暗い顔を薄く照らした。アルトが飯盒の蓋を閉める。

「ごちそうさま」

立ち上がり機体に向かって歩き出すアルト。その背中にシヤロは話しかける。

「もういいの？」

「ごめん、なんだかもうお腹がいっぱいなんだ」

振り向かずそう答えるとアルトはコクピットの中に入っていた。

「アルト……」

シヤロは闇夜に消えていく彼の背中を辛そうに見つめた。

機体に入り込み、アルトはコクピットシートに背中を預ける。電気系統の点いていないコクピット内は静寂に包まれており、開いた瞳さえ闇の中に閉ざされてしまうほど暗かった。

「なにも、できなかつた……」

先の戦闘、アルトは一步としてその場を動くことができなかつた。それはテレサの駆るディアスターカーが無類の強さで敵を蹂躪したことが大部分を占めているがそれを差し引いても彼は一切行動のすることのできない自分の弱さが受け入れられなかつた。

「まだ、俺は……」

噛みしめた彼の口の中に淡い血の味が広がった。

——ここは、どこだ？

気が付くと少年は漆黒の中にいた。周囲を見渡しても何も見えず、足を踏み込んでも前に進んでいるのかさえわからない。

少年がわけもわからずに歩き続けていると、眼の前に何かが見えてきた。彼はそこに向かって走り出す。

段々と姿形が鮮明になっていき、少年はそのすぐそばで立ち止まった。少年の眼下に映ったのは死体だった。

死体はうつ伏せになり、顔は見えない。少年は既視感を抱く。既視感の正体を確かめるために少年はその死体をめくった。

それは少女の死体だった。小さな体躯に赤い髪を持った少女は腹部から紅く滲んだ血を滴らせる。

ポタリ、ポタリと流れる血が徐々に少年の瞳に光を灯していく。それと同時に少年の顔が恐怖に歪みだす。

「シャ……ロ？」

掠れた声で呼びかけても少女の濁った瞳は動かない。

「シャロ！ シャロ！」

何度も繰り返し返したところで少女の返事は無く、その華奢な体はどんどん冷たくなる。

「助けを呼ばないと！」

少年が助けを乞おうと顔を上げる。そしてすぐに彼は言葉を失った。

先程まで漆黒だった世界に、いくつもの死体が転がっている。それの全てに少年は見覚えがあった。

「曦夜……エレナ……ナナ姉……」

声を、表情を、感情を、少年が命を交わし合った人々が今彼の目の前で息絶え、屍になっている。

「誰が、誰がこんな事を……！」

「お前だよ」

突如漆黒の中から男の声がする。少年はその声のする方を見つめた。段々と暗闇の中から人影が見え始める。それは死体の海を歩きながら少年の元に歩いて来ていた。

少しずつ輪郭がわかりはじめる距離になった時、そこに立っていたのは一人の少年だった。

背丈は同じくらい、髪の毛も青空のように淡い綺麗な髪を肩まで伸ばしている。ただ一つ違うとするならば、その目は鮮血のように紅色をしていた。少年が尋ねる。

「俺が、殺した？」

もう一人の少年がその言葉に頷く。

「そうだ、お前の弱さが殺したんだ。彼女を、ここにいる全ての人を」
「そんな、馬鹿な……」

少年が後ずさる。踵が死体にぶつかり少女の、全ての死体の乾いた瞳が少年を見つめた。

「ひっ」

少年の体が死体から数歩下がる。その目はまるで彼女達を救えなかったことを疎むように怨嗟の籠った眼差しで少年のこゝろを見つめていた。

彼は自分の頭を抱えるとその場にうずくまる。

「嘘だ、嘘だ、嘘だ！俺は殺してない！」

首を振り、少年は叫ぶ。

「守れなかったんだ。お前が弱いから、大事な人はみんな死んでいった」

近づいてくるもう一人の声。

近づく声に少年は耳を塞ぐ。しかしその声は彼の耳の奥に直接流れ込んでくる。

「お前は独りで戦うべきだ。そして、独りで死ぬべきなんだ」

声が、足音が近づいてくる。気が付けばそれはすぐ目の前に立っていた。

少年は顔を起こす。銃口をこちらに突きつける自分の姿がそこにあった。無言で見つめ合う二人。紅い瞳が感情の無い声を放つ。

「お前は、誰の命も背負えない」

その言葉と同時に少年は引き金を引いた。

3話

「うあああああー！」

絶叫と共にアルトの意識が目覚める。開いた瞳孔が収縮し、次第に現実へと焦点を合わせる。落ち着きを取り戻した心臓が深い呼吸を繰り返した。

「夢……う？」

アルトは自身の右手を弱々しく見つめる。血糊の付いていた右手はじつとりと汗ばんでいた。

コートを肩に羽織り、ハッチを開く。冷たい夜風が乗り出した体を通り過ぎていく。見つめた東側の地平線の彼方が淡く白い光に燃え始めていた。

「夜明け、か」

アルトは機体から降りて地面に着地する。冷たい砂の感触が彼の手を通して全身に伝わった。

「まだ、寒いな」

彼の言葉を掻き消すように風が吹き、コートの裾をはためかせる。脳裏では未だにあの不快な夢がその顔をチラつかせていた。

「おはよう、アルト」

湿った風に乗って気の抜けた声がアルトの耳元に届く。振り返ると寝間着姿にマントを羽織ったシャロの姿があった。

「シャロ」

一瞬少女の姿が紅く染まり、また景色が砂漠の中に戻る。

「……」

「どうしたの？」

目を擦るシャロ。夢の中のことだとわかっているにもかかわらずあの凄惨な光景は心の奥底にこびりついて離れない。

「シャロは、死なないよな」

自分の言葉と共にいつのまにか俯いていた顔を上げる。視線の先では目尻に涙を貯えながらシャロが大きな欠伸を漏らしていた。

「ごめん、聞こえなかった。なあに？」

アルトはわずかに口角を上げるとだらしのない顔の少女に向けて首を左右に振った。

「朝ご飯にしよう。シャロも着替えたら手伝って」

シャロは眠そうにコクリと頷くと再び機体の中に戻って行く。アルトは光に照らされる小さな後ろ姿を不安気に見つめた。

日は昇り、砂漠は蜃気楼を描きながら今日も迷い込んだ旅人を熱砂の世界へと呑み込んでいく。

アルト達三人は中継キャンプに向かって代わり映えのない景色の中を走り続けていた。

むせかえるほどの熱気に呑まれたコクピットではアルトの額を伝って落ちた汗が静寂の中にわずかな音を立てる。そして同じく汗まみれの腕で額の汗を拭った。

見渡す限りの砂漠に辟易^{へきえき}しながらもその歩みを進める三人、その殺風景極まりない景色に彼らの瞳が虚空を見始めた頃、目の前に小さな変化が現れた。熱砂の中にぽつりと生えた小さな影、目を凝らした三人が息を揃えて乾いた声で叫んだ。

「キャンプだ！」

三人の顔に生気が戻り、機体の速度が知らず知らずのうちに速くなる。駐機場に入った瞬間三人は投げ出すように機体を止めると勢いよくコクピットから飛び出した。

「やっと着いたあー！」

シャロが檻から出して貰えた小動物のように辺りを飛び回る。

「全く、子供ね」

曛夜は腕を組んで呆れているが数時間振りの開放感に体が小刻みに揺れていた。

アルトは組んだ腕を太陽に向けて伸ばすと止められている機体を眺める。目当ての機体が無いことを確認すると小さく肩を落とした。

「……ないか」

そう呟き、キャンプに向かおうとしたアルト。その背中をシャロが引き留めた。

「ねえ、ちよつと待って。あれって……」

彼女の指先が示す方向を辿っていくと一人の男性に目が行った。テントの壁に寄りかかり皺だらけの男性用雑誌を眺める男。三人はその男に見覚えがあった。

「カルシエンさん！」

名前を呼ばれた金髪の男が徐に視線を持ち上げる。そして彼らの顔を視認すると彼は雑誌をしまった。

「よう！全然見かけねえからてつきり死んじまったのかと思っちまったよ」

そう言いながらカルシエンはアルトの下に歩いてくる。

「俺達そんなに遅かったんですか？」

カルシエンは首筋を掻くと「見ろよ」駐機場を指差した。アルト達が指差された場所に目を向ける。それなりの数が止められるはず駐機場はその三分の一も埋まっていなかった。

「まあ、下の上ってところだな。先行して進むやつらはもう昨日の夜にはここを出たよ」

「よおお前ら！生きてたか！」

声が出た方を向くとトレーニングウェアを来たフリーズの姿があった。彼女の美しく鍛え上げられた肉体に玉の汗が浮かび、開放的に露出した豊満な胸部から湯気が上がるその姿は周囲の男性の視線を釘付けにした。アルトは思わず視線を逸らし、カルシエンはため息を吐き出す。

「お嬢、はしたないからそんな格好で外に出ないでくれよ。あんたも一応女性なんだから」

「るせーなあ、熱あちいんだから仕方ねえだろ」

フリーズは小さく舌打ちをするとシャロと曦夜を見た。

「お前ら、シャワー浴びたか？」

『シャワー』という単語に女性陣の瞳に輝きが宿る。

「シャワーあるんですか!？」

フリーズは二人の顔を見てニツと笑い腰に手を当てた。

「よし！じゃあアタシに付いてきな！」

フリーズがテントに向かって歩き出す。二人もその後を追ってテ

ントの中に消えていった。

カルシエンは三人が視界から消えると小さく溜め息を吐き出す。

「全く、彼女は自分が周りの目を惹くことをもう少し覚えてほしいな」
アルトも彼の言葉に苦笑いを浮かべた。残された男二人の間に沈黙が訪れる。

「二人はいつ頃ここを？」

少しでも間を繋ごうとアルトが話題を提供する。カルシエンは彼の言葉を聞いて呆れ顔で自分の肩を揉んだ。

「本当はウチの隊長が帰ってきたらすぐにも出発する予定だったんだがなあ、この調子だとココを発つのは夕方頃になるな」

そう言って彼はしわだらけの雑誌を再び取りだすと日陰のある方へと歩きだす。しかしその途中カルシエンは足を止めると首だけをアルトの方に倒し、まじまじとアルトの顔を見た。

「ボウズ、お前もシャワー浴びてきたらどうだ？」

唐突な彼の言葉にアルトが不思議そうに首を傾げる。

「いや、俺は別に……それに機体の整備もしないと——」

「いいから、浴びて来い」

若干彼の語気が強まった。たったそれだけの一言にアルトの背筋が悪寒が走った。

カルシエンはため息と共に瞳を閉じる。再び開かれた瞳にはさつきまでの爽やかな笑顔が消えていた。

「そんな顔で戦うやつが生き残れるほど、戦場は甘くない」

アルトはすぐそばに停めてあったジープのミラーに映りこんだ自分の顔を見る。汗と砂で汚れた顔、血の気の失せた頬、そして酷く渴いた青い瞳が自分の姿だと気が付くのに、若干の時間があった。

自分の頬の汚れを拭うアルト。頬に触れた手の甲には不快な感触が滲んでいた。カルシエンはそれを見て表情を柔らかくする。

「身なりの清潔感モチてる男の第一前提だ。覚えておきな」

そう言っただけは小さくウインクを決めた。アルトもそれに頷いて返す。

アルトがテントに向かって歩いていく。陽炎の中に消えていく少

年の背中を見つめた男は肩を上げて短い息を吐いた。

「全く、青すぎるんだよなあ。眩しいくらいにさ」

簡素な板で仕切られた座ることもできないほど狭い個室、その壁へ乱雑に繋げられたノズルから流れて出るシャワーは水というには温かく、お湯と呼ぶにはまだ冷たい。そんな温い水が少女の髪を伝って地面に落ちていく。しかし彼女たちにとってそれは一流ホテルにも勝るとも劣らない心地良さがあった。

「んー！ まさか砂漠の真ん中でシャワーが浴びることができるとは思わなかった！」

シャロは頭上から流れ落ちるお湯に自らの体を晒す。少女の体には日焼けの後がうつすらとできていた。

「本当、なんでこんなところにシャワーが？ ありがたいから別に良いけど」

疑問を抱きながらも曦夜は気持ちよさそうに泡を自分の腕に滑らせていく。彼女の体にもまた、日焼けの痕が残っていた。

「なんでもこの地下に水脈があるらしくて、そこから水を引っ張ってきてるらしいぜ」

体中に泡を纏わせたフリーズが栓を開く。噴き出したお湯が彼女の体を洗い流した。白い泡が排水溝の中に吸い込まれ彼女の赤毛が姿を現す。濡れて垂れた髪は彼女の右目を覆い、その先端からは水滴が等間隔に落ちていく。彼女は右手で自身の髪の毛を掻き上げると左右に首を振った。

「あー、さっぱりしたぜ」

フリーズは清々しそうに声を上げると背の低い隣の柵に腕をかけ、隣の部屋にいるシャロの姿を見下ろした。

「それで、あの青髪のボウズと付き合ってるのはどっちなんだ？」
「へ!?!」

シャワーの栓を開けようとしたシャロが頭上を見上げる。にんまりといやらしい笑みを浮かべたフリーズの姿が視界に映った。

「アタシじゃないわよ」

彼女達の隣の部屋から義夜の声が響く。柵の上から泡まみれの頭

をした少女が顔を出した。

「へえ、チビガキはあいつに興味無いのか」

義夜はパイとそっぽを向ける。

「私の好みはあんなちんちくりんじゃないの!」

フリーズは「ふーん」と頬杖をつくと徐にシャロの顔を見つめた。

その視線に気が付いたシャロはブンブンと首を横に振り、彼女の視線を否定する。

「違う違う! あいつはアタシの従者! そんな風にあいつを見るわけないから!」

身振り手振りを交えて否定するシャロをフリーズはクイクイと指を動かして呼び寄せる。シャロは首を傾げながら彼女の方へと近づいた。するとフリーズの右手がシャロの髪の毛をわしやわしやと撫ではじめる。

「な、なに!」

シャロはフリーズの手を両手で払いのけた。

「悪い悪い、お前の反応が面白くてよ。ついからかいたくなっちゃまった」

白い八重歯を見せてニツと笑った後、フリーズは微笑ましそうな顔で困惑するシャロを眺めもう一度くしやくしやと少女の赤髪を撫で回した。

「なんなのさ、もう!」

もう一度その手を振り払うシャロ。フリーズはドアを開けるとひたひたと水の滴る足で歩き始めた。濡れた髪を馬の尾のように左右へと揺らしながら歩いていた彼女がふと途中で足を止める。

「ああいう男は意外とモテるぜ。従者のままでいさせたいのならしっかり手綱を握っておきな」

「……え?」

シャロがドアを開けた時にはもうフリーズはこの部屋から姿を消していた。

それぞれが英気を養っている間に、砂漠は刻一刻と表情を変えていく。揺らめく蜃気楼は夕暮れに消え、寒々しい夜が静寂を呼び込んで

くる。

人の数もまばらになったキャンプの駐機場でアルト達はカルシエンとフリーズに別れの挨拶をするべく集まっていた。

「そんじゃ、ひとまずここで別れだな」

沈みかけの夕焼けがカルシエンとフリーズの顔を照らす。

「二人ともお気をつけて」

アルトの言葉にカルシエンは小さく頷き返した。

「サンキュ、そっちも死なないようにな」

別れの挨拶を交わし二人は自分の機体に向かっていく。カルシエンがアルトの肩とすれ違う瞬間、彼が徐に口を開いた。

「ああそうだ、昨日のクールなレディならまだここには来てないぞ」

心の中を見透かされたようなカルシエンの一言にアルトが急いで振り返る。

「なんでそれを……!?!」

立ち止まり首だけをアルトの方に振り返るカルシエン。彼はわずかに口角を持ち上げて笑みを見せた。

「さて、どうしてだろうな?」

そう言い残すと彼はコクピットの中に入りこんでいく。ほどなくして二機のレンジャーの目にオレンジの光が灯り、その巨軀が動き始めた。闇夜の砂漠に二機のレンジャーが消えていく。

「さあ、アタシ達も休もう。明日の出発は早いよ」

三人はキャンプの中に向かって歩いて行く。彼らが消えた方角では満月が不気味に夜空を照らしていた。

結局この日キャンプに残っていたのはアルト達三人を含め十人もいなかった。空きだらけになったキャンプでは各々が好きなテントを陣取り、そこを自分の寝床として使うことになり、アルトもまた小さなテントの左右に並んだ二段ベッドの上部で一人眠れない夜を過ごしていた。

「広い……」

普段狭いコクピットや開いた隙間に雑魚寝をするのが当たり前になっていたアルト。彼にとってこの空間の広さは少々落ち着ききれ

ない環境になっていた。

「贅沢な悩みだな」

自嘲気味に笑うと彼は静かに目を閉じる。しかし彼の意識は未だここにあつた。

不意にテントの入り口が開かれる。アルトは枕元に入れてあつた拳銃に手を伸ばす。

「……待って」

指先が触れたところで聞きなれた声がアルトの耳に入る。入り口を見下ろすとそこにはコートを肩に賭けたシャロがいた。

「シャロ？ 何かあつたのか」

「何というわけではないけど、一人でいるのが落ち着かなくて……」

シャロは「えへへ」と笑みを浮かべる。アルトもその言葉を聞いてわずかに微笑んだ。

「俺も何だかここが広く感じて眠れなかったんだ。好きなどこ使いなよ」

「ありがとう」と言つて彼女は彼の反対のベッドの下側に入った。静かな時間がゆつくりと二人の間に流れる。よくある二人きりの夜。しかし今日に限つてはどこか空気が違つていた。

「そう言えばアタシたちが最初に出会つたのつてこの砂漠だったよね」

徐にシャロが口を開く。

「ああ、シャロが流砂に埋もれそうになつた俺のことを助けてくれたんだろ？」

アルトは目を瞑つたまま彼女に言葉を返す。

「そうそう、ベッドの上でミイラ男みたいになつたアルト、面白かつたなあ」

くすくすとシャロが笑う。アルトは小さく溜め息を吐き出した。

「人の危機を笑うなよ……」

肩を竦めたアルトだったが彼も少しの間を置いてまた小さくと笑う。

「でも、そのおかげで俺は今此処にいる。こうやってまだ、ここで生き

てる」

「アルト……あんまりカツコよくないよ」

アルトの体がベッドからずり落ちそうになる。

「カツコつけてるわけじゃないから……」

体の位置を元に戻しアルトは布団をかけ直す。不貞腐れ寝ようとしたところで「だけどね」とシャロが言葉を付け加えた。

「アルトがアタシの所に来てから毎日が楽しいんだ。アンタが増えた分お金はかかるようになったけどナナ姉達と出会って、エレナが仲間になって、アタシ一人じゃ見えなかった世界をアルトのおかげで知る事が出来た」

「アンタが増えた分お金はかかるようになったけどね」と苦笑いを浮かべるシャロ。アルトは静かに彼女の言葉に耳を傾けた。

「これからもよろしく頼むよ、アタシの従者」

「こちらこそ」

暗闇の中で二人の視線が重なる。途端にさっきまでの会話が恥ずかしくなり二人は顔を背けた。

「お、おやすみ！」

「うん！ おやすみ」

ぎくしゃくとした会話を無理矢理に終わらせて二人は目を閉じる。

「……アルト、アタシは死なないから」

消え入りそうな声でとシャロが言葉を呟く。

「え？ 今なんて言——」

——ドオオン!!

アルトが彼女の言葉を聞き返そうとした瞬間、大気を震わせる激しい音と共に地面が揺れた。

「なんだ!?!」

アルトはベッドから飛び降りるとテントの入り口を開いた。外に顔を出した瞬間、焼け付くような激しい熱気が体中を打ち付ける。アルトは一瞬目を細めるが、目の当たりにした光景にすぐ目を見開いた。

「なっ……!」

彼の青い双眸に映ったのは燃えるテント郡の朱く巨大な炎だった。

「なにこれ、敵襲?！」

突然放たれた光にシャロは目を細める。

「兎に角、俺達の機体の所へ行こう!」

テントを飛び出して走り出すアルトとシャロ。駐機場に行く二人に向かって手を振る曦夜の姿があった。

「早く! こっちよ!」

「どうしてアンタがこんな所にいんのよ!」

「それは後! 早くアンタ達も自分の機体に乗って!」

曦夜に急かされ二人はコクピットの中に転がり込むと急いで機体を起動させた。

暗いコクピットが正面から淡い光を放ち、モニターが点灯する。アルトのレーダーが警報を鳴らし、周囲に敵がいることを知らせた。

「やっぱり敵襲か!」

アルトはレーダーの示した十時の方向上空に最大望遠で武器を構える。

炎上したキャンプの上にその敵はいた。燃え広がる炎が闇夜に隠れていた姿を映し出していく。

「なんで……?」

アルトはその姿を見た瞬間、まず目の前の機体が本当に存在するのかを疑った。

幾何学的な凶形で構成された装甲、紅蓮のなかで揺らめく暗い青色の独特なカラーリング。バイザーの奥で光を放つ青いカメラアイ。

「なんで……!」

それはまるで砂漠に沈んだはずの亡霊が、今度は月から舞い降りた使者となって炎の上に佇んでいる様に彼の目には映って見えた。

「なんで、お前がここにいるんだよ……」

自分の愛機だったモノの名前をワケのわからない感情のままに少年は叫んだ。

「——ダガー!」

4話

闇夜の砂漠は眩い紅蓮に染まっていた。燃え盛る炎が辺り一面を覆い、散っていく火の粉は空へと舞い上がる。宙に漂った火の粉の一片が青い装甲を微かに焼いた。

少年はそれに気が付くことすらなく、震え、血走った瞳で上空のソレを見つめる。それは彼にとってまるで夢のような光景であり、悪夢以外の何者でもなかった。

「どうして、お前がここに……!?!」

眼前に佇むダガーへと問いかけるも応えは返ってこない。代わりにダガーは左手に持ったレーザー砲をアルト達に向けて構えた。

「アルトッ！ 避けて！」

シャロの叫びにアルトはその場から反射的に飛び去る。次の瞬間、彼が先程までいた場所が爆炎と共に爆ぜた。その光景にアルトの額を冷たい汗が流れる。

一撃で仕留められない事を悟ったダガーは主砲を収めると今度は盾に内蔵されたガトリングを掃射し始める。

「皆、散開しろ！」

アルトの指示で三機がそれぞれ別の方角に散っていく。アルトは無数のガトリングが巻き上げた砂埃を巧みに使い、敵の攻撃を間一髪のところまで躲しながら相手の注意を引く。

「これでも喰らえ！」

ダガーの側面に回り込んだシャロのアイアンヘッドSが両肩に積まれた二連装キャノンを放つ。ダガーはわずかに上体を後ろに反らすとそれをいとも容易く躲した。

「避けた!?!」

当たると確信したはずの攻撃が通らないことに驚きの感情を露わにするシャロ。

「だったらこれで！」

上空から急襲したブロードソードの砲塔からビームが相手の頭部目掛けて撃ち出される。しかしダガーは首をわずかに右に傾けると、

閃光はその横を過ぎ去り地面を抉った。

「なんで当たらないの!」

舌打ち交じりに曦夜が声を荒げる。

アルトは砂塵を薙ぎ払い、再度武器を構える。

「シャロ! 二人でかかるぞ!」

「うん!」

アルトの言葉にシャロが頷く。アルトとシャロの弾幕が十字砲火を作る。ダガーはその弾丸の雨の中を踊るように鮮やかな動きで避けていく。

「ちよつとは当たりなさいよ!」

曦夜のブロードソードが加わり、攻撃の手が増える。しかしそれでもまだダガーの装甲には傷一つ付けることはできていない。

「いい加減当たれ!」

痺れを切らしたシャロのアイアンヘッドがマトックを持ち、ダガーに向けて走り出す。地面を踏み鳴らし眼前の敵に踏み込むシャロ。上空へと飛び上がり敵の背後で右手の得物を振り上げる。その瞬間、不意にアルトはダガーの無防備さに違和感を覚えた。

「行くなシャロ! これは罠だ!」

咄嗟にアルトは叫ぶ。暗闇の中でダガーの青い瞳が標的を捉えるのはそれと同時にだった。

空中で身動きの取れなくなったアイアンヘッドの胴体にダガーの強靱な右足から繰り出されたソバットが命中する。鋼鉄のぶつかる鈍い音と火花が散り、アイアンヘッドが砂漠の上を転がった。

「きゃあああ!」

コクピットが揺さぶられシャロの悲鳴が機内に響く。今まで滞空を続けていたダガーが徐々に高度を下げ、その足を地面の上に乗せた。足元に倒れた機体を見下ろすダガー。その右手に握られたライフルは銃口を敵に向け、淡い光を収束させていく。

「くっ……!」

逃げ場を失ったシャロは瞳を強く閉じる。

光の収束が限界に達しエネルギーが放出されようとした直前、ダ

ガーの目の前を何かが通り過ぎ、地面に突き刺さった。全員の視線がそこに注がれる。そこに刺さっていたのは一本の巨大な槍。飛んできた方向へ振り向こうと瞬間、ダガーの体が巨大な衝撃に襲われた。ライフルの引き金から指が外れ、狙いの逸れたビームが砂漠を焼き切り、夜空を彼方まで裂く。

ダガーの体にぶつかったのはアルトの駆るアイアンヘッドLGだった。

「やめろおおー！」

アイアンヘッドの全力の体当たりでダガーの体が弾き飛ばされ宙を舞う。しかしすぐに姿勢を立て直すとダガーは地面へとしなやかに着地した。アルトも突き刺さったランスガンを拾い上げると敵にその切っ先を向ける。

「大丈夫か!?! シャロ！」

「問題ない！ 少し装甲が傷付いただけ」

アルトは安堵のため息を吐くとモニターに映った敵の姿を見つめ、もう一度後方のシャロと曦夜を見た。

目の前の敵に向き直り、武器を構え直す。

(このままじゃいずれやられる。どこかで逃げる隙を見つけないと……)

『……お前は、誰の命も背負えない』

突破口を探していた最中、突如彼の自身の背後から耳元へ囁くような声が響く。

「……ッ！」

血の海に横たわる少女の姿が呼び起され、少年の背中に悪寒が走る。呼吸が狂い徐々に荒くなり、視界がぐらぐらと揺らぎ始める。

「これからどうするの、アルト！」

無線から聞こえる少女の声。少年は無理矢理に呼吸を整え、奥歯を強く噛み締めた。

「……逃げろ、二人とも」

彼の言葉を聞き取った二人の動揺が無線越しに伝わる。

「どうしたのよ急に!?!」

困惑する曦夜。アルトは目の前の敵を睨んだまま言葉を続ける。

「俺たちが束になつてもこいつには勝てない。だからせめて、俺がこいつを引き留める！」

「引き留めるって……三人で勝てないならあんた一人で勝てるわけないでしょ！」

「そうだよアルト！ だったらせめて三人で——」

「それじゃあ、みんな死んでしまおう！」

シャロの言葉を遮り、アルトが叫ぶ。荒くなった呼吸を落ち着けて彼は言葉を切り出す。

「あのパイロットは超一流だ。全員で逃げたつてすぐに全滅してしまう。だったらせめて俺がここで、アイツをくい止める！」

「だったらその役目は私が……！」

「——ダメだ！」

今まで二人が聞いたことがない程の音量でアルトは声を叫ぶ。

「これは、俺の問題なんだ……」

その言葉の後、三人のコクピットが静まり返る。重苦しい静寂を最初に崩したのはシャロだった。

「……死なないって、約束できる？」

「シャロ！」

驚きを隠しきれない曦夜の声。シャロは小さなため息を吐き出すとアルトのアイアンヘッドLGを見た。

「従者のことを信じるのも主の役目だからね」

「……ありがとう、シャロ」

「約束、ちゃんと守りなさいよ」

少女の言葉に少年は操縦桿を握りしめるとわずかに口元を持ち上げた。

「ああ！」

話がまとまったのを見計らったかのようにダガーが武器を手に構える。それと同時にアルト達三人も行動を開始した。

「二人とも、逃げて！」

ブロードソードとアイアンヘッドSが全身を反転させ、敵から遠ざ

かつていく。それに気が付いたダガーは二機に向けて追尾式のミサイルを向けた。しかしその目の前にアイアンヘッドLGが現れ、ランズガン突き出す。ダガーは射撃を中断すると自分との間に盾を挟んだ。鋼と鋼が激突し耳障りな音を立てて火花が散る。ダガーとアイアンヘッドLGが互いのメインカメラを睨み合った。

「お前を、ここから先には行かせない！」

アイアンヘッドの膂力に耐え切れずダガーが背後に飛び退く。それと同時にガトリング

を放ち、追撃を防ぐためにアルトの足を止める。

「クソッ！」

敵の射撃を盾で防ぎ、アルトもその場から抜け出して射撃を行う。二つの青が月下に照らされ、火炎に彩られた砂漠の上を走り抜けていく。

背面のスラスターで宙を駆けるダガーの後をアイアンヘッドLGが走って追いかける。

徐々に離れていく距離。定めた狙いは悉く外れ彼の撃ちだした砲弾はダガーの足元で勢いを失う。

「なんて速さだ、これじゃ追いつけない！」

直後、ダガーが轉身しバルカンを向けた。

「ヤバイ！」

即座に機体を右に傾ける。さっきまで頭部のあった個所を緑の閃光が高速で過ぎ去っていく。コクピット内に被弾のアラートが鳴る。どうやらさっきの攻撃が頭を少し掠めたらしい。

ダガーはガトリングを打ち続けながらアルトへと迫ってくる。

「そっちがその気なら！」

アルトは自分を襲う弾に当たらないよう、姿勢を低くしながら敵との距離を詰めていく。

互いが近づくにつれて光弾がアイアンヘッドの装甲を削り取っていく。アラートメッセージが止まず鳴り響き、自身の危険を主に伝える。

「保ってくれよ、アイアンヘッド……！」

アルトは愛機の操縦桿を強く握りしめるとアクセルペダルを全力で踏み込んだ。アイアンヘッドLGのエンジンが限界まで回転し、B Mサイズで考えれば小さなその体は大地を揺るがすほどに激しい一歩を踏み込んだ。縮まっていく彼我の距離、真正面から走っていく二機の間隔が触れ合いそうになる限界にまで達した瞬間、アルトは急ブレーキを踏んで機体を後ろに勢いよく倒した。次の瞬間、コクピットがあつたはずの場所に電磁クロスボウの矢が飛び出し、虚空を貫いていった。

全力疾走の勢いを殺さずに砂を掻き分けてスライディングの姿勢をとるアイアンヘッドLG。空を飛んでいたことにより生まれた小さな空間にアルトは滑り込むと敵のコクピット部分でランスガンを構えた。

「これで、どうだああ！」

弾倉に残っていた鉄球をすれ違いざまに一発残らず全て叩き込む。

硬いもの同士がぶつかり、どちらかが潰れる音が立て続けに戦場を震わす。ダガーはあまりの衝撃の強さに上空に打ち上げられ、地面に落下すると周囲に砂埃を巻き上げた。

砂で汚れ切ったアイアンヘッドLGがゆっくりと大地に起き上がる。

「はあ、はあ……」

アルトは荒い呼吸を繰り返しながら機体の損傷状態を確認した。さっきの無茶な操縦のせいで各関節部が悲鳴を上げている。詳細状況を確認してアルトは安堵の息を吐いた。

「……戦闘さえしなければ、何とかシャロ達のところに戻れるか」

そう呟き戦場を一刻も早く離れようとした瞬間、アルトの背筋を凍り付くような不快感が襲った。直後、後方から攻撃のアラートが響く。

無意識に体が操縦桿を握り直し咄嗟の回避行動に移る。何か砂埃の中を突き破って現れる。アイアンヘッドLGの右腕肩関節にそれにぶつかり、機体の腕ごとまぎ取って地面を転がった。

右腕をもぎ取ったもの、それは表面が凹凸に歪んだ盾だった。

震える体で砂埃の立ち込める場所を見つめるアルト。徐々に晴れていく砂煙、その中で真紅の光が不気味に揺れた。

一陣の風が吹き、ベールを解くように砂埃が消える。傷一つないダガーがその場には立っていた。

「嘘、だろ……」

——防がれた。

死力を尽くした攻撃が全て。

その事実は次第に体の奥に染み込み、少年の思考を曇らせる。

ダガーは射撃用の武器を全てしまうと一振りのダガーナイフを構える。そしてアルトの下へと走り出した。

生存本能が無理矢理にアルトの意識を現実に取り戻す。

機体を後ろに仰け反らせ、最初の一撃を寸でのところで躲す。続いて繰り出される二撃目。一步後ろに引かせてアルトはそれを回避した。三撃目に繰り出された突きを躲すと残された左手で殴り掛かる。

「あああああー」

言葉ですらない叫びと共に放たれる拳。ダガーはそれを空いたもう片方の手であっさりと掴んだ。ダガーの腕に力が籠る。アイアンヘッドLGの装甲にダガーの指が食いこむ。ギリギリと音を立てながら腕が引つ張られ、関節部が露わになる。ダガーは自身の右手を勢いよく後ろに引くと残された最後の腕をいとも簡単に引き千切った。

痛みに悶え苦しむ愛機の悲鳴がコクピットでアルトの耳を劈く。

「はあ、はあ、はあ……」

収縮を繰り返す瞳孔。視界が赤く染まって見えるのは、そこらじゅうで鳴り響くアラートか、あまりの動揺に充血した目か、それとも目の前で自分を恨めしそうに眺める彼の紅い輝きか。

文字通り打つ手の無くなったアルトの体は震え、もはや操縦桿に触れることさえできていない。

鉄クズと化したアイアンヘッドの左手を地面に落とすと、ダガーは得物を逆手に持ち替える。ナイフの切先がコクピットに狙いを定める。直後、青い剛腕が横に薙いだ。

——バギイン！

アイアンヘッドLGの膝関節が限界を迎え、機体が膝から崩れ落ちる。それにより狙いの外れたナイフはギヤリギヤリと鉄を抉り取り、アイアンヘッドの頭部を吹き飛ばした。

アルトの体が外気に晒される。血のような深紅に燃えるバイザーが少年の光を失った青い瞳と重なった。ダガーが逆手に持ったままのナイフを両手で握りこむ。

決して運命は変わらない。たとえ一度の偶然で命が長らえたとしても、運命から逃れることは叶わない。

『お前は独りで死ぬべきなんだ』

耳の奥でそう、誰かに言われた気がした。

ダガーの腕が自分の頭上に持ち上がっていく。その長い腕が限界まで天に掲げられた瞬間、その刃は眼下の敵に振り下ろされた。

5話

眩い輝きを放つ月光、世界を黒く飲み込んでしまいそうな夜空、そして紅の瞳を宿した鉄の巨人。

巨人の両手に握りこまれた短剣はそのすべてを銀（しろがね）の刀身に映し出し、今一つの命を奪おうと天高く引き上げられていた。切っ先を向けられた哀れな少年は限界まで拡張された瞳で頭上に浮かぶ景色をただ愕然と眺めることしかできない。

自分の命が潰える絶望か、因縁めいたこの地に死を誘われたのか、彼の体はそこから一步として動けない。小刻みに震える指の間を夜風が通り過ぎ、熱の籠っていた体は急速に凍え始める。

心臓は破裂しそうなほど血を体へと巡らせているはずなのに全身の血の気はみるみるうちに引いていく。

少年の中に「死」の輪郭が見えた瞬間、無情にもその刃は闇の中に煌めいた。

振り下ろされた刃が小さな命を刈り取り、鮮血が砂漠に一凜の花を咲かせる、ことは無かった。

確実な殺意を持って迫ってきたはずの切っ先は少年の眉間の数センチ手前で止まっていた。

砂漠を薙いでいた風が止む。二つの巨大な影が砂漠に映し出されていた。

「……なん、で？」

渇き、潰れそうなほど絞まった喉からひどく掠れた声が出る。

短剣の切っ先が徐々にアルトから遠ざかっていく。ダガーは完全に立ち上がると首を右に曲げた。そしてすぐさまその場から勢いよく飛び退く。直後、一筋の閃光がアルトの目の前を切り裂いた。

爆風が少年の体を通り過ぎる。どこかで見た光景、どこか起きた展開、脳裏を何かが駆け巡り、ぎこちない動きで振り向いた首と未だ震える瞳はこちらへと迫る一機のBMの姿を捉えた。

暗闇の中で煌めく藤色の怪しい輝き、その可憐な姿を夜に溶かす紅碧の装甲。静寂の空を切り裂きながら主に追従するドローン。そし

てそれを駆る女の姿をアルトは鉄の扉の向こうで確かに感じ取った。ディアストーカーはまるでアルトを庇うかのように半壊したアイアンヘッドLGの目の前で華麗な着地を決める。そしてゆっくりと首を持ち上げ、上空で静かに佇むダガーを睨んだ。

狩人と短剣。灼けるような二つの殺気が周囲に充満していく。それがこの小さな空間を満たしきるのにそう時間はかからなかった。

ディアストーカーがライフルを構える。ダガーが回避行動をとった瞬間、ついさつきまでコクピットがあっただであろう場所を熱線が通り過ぎていった。

直後、二基のドローンがダガーの背後を取る。青い光が十字を描くが、ダガーは爆発的な速さでその射線を掻い潜り、さらに上空へと昇る。

「避けられた……？」

テレサは当たると確信した攻撃が外れたことに思わず声が漏れる。相手の頭上を取ったダガーは、すぐさまビームマシンガンを構えてディアストーカーに向けて引き金を引いた。

テレサがペダルを軽く踏み込む。それに合わせてディアストーカーも地面を蹴って飛び上がった。弾丸が標的の残像を掻き消しながら獲物の後を追う。ディアストーカーもまた敵のわずかな隙を見つけてはライフルとドローンを交えて応戦を開始した。

二つの光線が暗闇を駆け巡り、互いの命を奪おうとせめぎ合う。ダガーを包囲し熱線を放つドローン。ダガーはバレルロールで回避しつつ電磁クロスボウでディアストーカー本体に狙いを定めた。

撃ち出される光の矢、テレサは最小限の動きで次々と迫りくる矢を躲していく。二機の機体が繰り広げる一進一退の攻防、星よりも激しい瞬きが夜空で明滅する。

マシンガンから放たれるビームを後退しながら躲すテレサ。ディアストーカーが右手を前に突き出すとその軌道を追ってドローンが発射される。ドローンは敵の射線を掻い潜り懐に入り込むと頭部目掛けてレーザーを放った。ダガーは一瞬早くそれに気が付き、回避を行うが光線がマシンガンを貫く。ダガーは赤熱化した武器を放り投

げると、その場から離れる。宙に浮いたマシンガンが爆発し、一際強い光を放つ。ダガーは地上に滑り込むように着地するが、その隙をテレサが見逃すはずはない。即座にライフルを構え、硬直中のダガーに向けて高出力のビームを放った。黄色い光の柱が地面を貫き、爆風が周囲を覆う。

焼けた砂が大気に晒され、黒く冷やされて再び地面に降り積もる。周囲は炎と砂塵に包まれ敵の姿を確認することはできない。しかしテレサはそこに狙うべき獲物の姿は残っていないと確信していた。

踵を返しその場を立ち去ろうとしたディアストーカー。突如そのコクピットで激しい警報が鳴り響いた。テレサは後ろを振り返ると燃え盛る炎の中に目を凝らす。揺らめく炎の中に一つ、不自然な影を彼女は自身の目に捉えた。

装甲の一部は煤けて黒く焦げているがそれ以外に目立った外傷はなく、依然として頭部のメインカメラには周りの景色とは不釣り合いな青々とした光が灯っている。

突如、ダガーの背負っていたバックパックが音を立てて変形し始める。鉄と鉄が重なり合い、それは一つの巨大な武装へと変貌を遂げていく。

完全な形となり、ダガーの目の前に構えられたのは身の丈以上もありそうなほどの巨大な砲塔。中心の空洞にダガーがレーザー砲を差し込むと銃口に青白い光が集まり始めた。

次第に激しさを増す光、燃え盛る炎の中でもそれは一際大きな明かりを放つ。破滅を湛えた輝きが限界を迎えた時、ダガーは指先のトリガーを引いた。

圧縮されたエネルギーが解放され、溢れだした光の奔流が上空の獲物目掛けて真っ直ぐに空を貫く。

それは先ほどディアストーカーが放ったものとは比べ物にならないほどの大きさで、まともに浴びれば機体は跡形もなく消え去ってしまうことはこの場にいる全員が容易に想像できた。

テレサはやや強引に操縦桿を動かすと巨大なエネルギーを紙一重のところ躲す。しかし右肩のマントの端がレーザーに巻き込まれ、

灰すら残さずに燃え散った。

地上から湧き上がった巨大な光が星空を裂いて彼方へと消えていく。ディアストーカーは姿勢を立て直すとダガーのいた場所に得物を構える。しかしそこにダガーの姿はなく、残された砂の波形が威力の凄まじさを物語っていた。

テレサはすぐさまレーダー機能を展開するとあらゆる方法で索敵を行う、しかしディアストーカーの探知可能範囲に確認できる機影は一機として存在しなかった。

「……ジャミング、か」

テレサは小さく息を吐き出すとゆっくりと機体の高度を下げていく。細く可憐な二本の脚が地面に砂塵を立てるのと同時にアルトの意識は闇の底へと堕ちていった。

最初に感じたのは凍えるほど冷たい空気だった。だらりと垂れた右の指先が微かに動く。薄く開かれた瞳が傷だらけの装甲を目の前に写した。

頭が重い。それに腹部のあたりを押さえつけられていて苦しい。

その状況からアルトは自分の体がアイアンヘッドの装甲に沿うようにしてうつ伏せになっていることにおぼろげながら気が付いた。

「うぐ……！」

錆びた歯車のように軋む腕で鉄板に手をつくると小刻みに震える腕に力を込める。

それに合わせてぎこちない動きでアルトの体が前へと這いずりだす。

腹部の苦しさが消えた瞬間、彼の体は重力に従って頭から地面に落下した。体中に砂を纏いながらゆっくりと仰向けに倒れたアルト。夜風に当てられ、徐々に意識が鮮明になっていく。

「そうだ！ 戦闘はッ……！」

勢いよく起き上がり、周囲を見渡すがそこにダガーの姿は無く、激しい戦闘の跡が無残に残るばかりだった。

背後を振り返る。両膝を大地に付き、今はもう無い頭を主に向けて下げるアイアンヘッドLGが月光にその痛ましい姿を晒していた。

アルトは傷付き、塗装の剥げた彼の装甲にそっと触れると優しい微笑みを自分の愛機に向ける。

「ありがとう。俺を守ってくれて」

あの時、アイアンヘッドの膝が折れていなければ彼はこの砂漠で首なしのミイラと化していたことだろう。

アイアンヘッドの雄姿を自分の目に焼き付ける。しばらくそうしていたアルトだったが、名残惜しそうに熱の籠った手をゆっくりと離し彼に背を向けて歩き出した。

周囲に散らばるキャンプの残骸を避けつつ暗い砂漠の中をアルトは進む。機体を失った今、彼にできることはないに等しい。凍える風に体は震え、彼の足から前に進む気力を奪っていく。

——シャロと曦夜は無事だろうか。

悪い考えが頭をよぎっては消えていく。気持ちの悪い汗が背中を伝って流れ落ちた。

再び意識が朦朧とし、視界が霞む。アルトは首を横に振って強く一歩を踏み出した。自分の中にある不安に負けないよう、しっかりと大地を踏みしめて歩く。

「大丈夫……あの二人なら無事だ」

そこのの奴にやられるほど彼女達は弱くない。そのことは誰よりもアルト自身がよく知っている。

「だから、今は俺がこの状況を抜け出さないと……」

「せめて動ける機体でもあれば……」そう呟きながら歩いていると砂の上に足跡が 付いているのを彼は見つけた。アルトはその場にしゃがみ込み、じつと足跡見つめる。

小さい足跡、大ききからして大人の男性ではない。一瞬シャロ達が戻ってきたかとも考えたが歩幅から見るに彼女よりも歩幅が大きい。

「となると……」

アルトは腰に掛けた拳銃を引き抜くと手前に構えた。足跡を辿って歩いていく。しばらく歩くと足跡は右に曲がって消えた。姿勢を低くしてゆっくりと進む。壊れた機体の残骸に身を隠すとそこから顔をわずかに覗かせた。

「ッ……い！」

最初に目に映ったのは暗闇の中で膝を折り、静かに佇む巨人、そしてその真下でそれを見つめる一人の女性の姿だった。

女性は大事そうに自分の機体を眺めている。

女性の口が小さく動く。それは風に遮られ、アルトの耳にまで届くことはなかった。

不意に女性の首が横に傾く。二藍色ふたあゐの長い髪の間から氷のように冷たい瞳がアルトを見たような気がした。

慌てて身を隠すアルト。

(……バレたか?)

少しの間その場で息を潜める。一筋の汗が頬を伝い、激しく鳴る心臓が自分の鼓膜を震わす。

荒くなる呼吸を抑え込み、アルトは静かに物陰から顔を覗かせた。

「いない……!?!」

先ほどまでBMの目の前にいたはずの人影が忽然と姿を消していた。アルトは視線だけを動かし、彼女の影を必死に追う。

(どこだ?! どこにいる!?)

目の前の状況を把握するのに精一杯だったせいか、アルトは背後から迫る殺気をわずかに遅れて気が付いた。

拳銃の銃口が背後を向く、寸前——

「動いたら撃つ」

透き通っているのに抑揚のない声がアルトの脳天に響く。

「銃をゆっくりと地面に下ろしなさい」

アルトは言われた通りに銃を地面に下ろす。銃は砂につくの時と同様に遠くに弾き飛ばされた。

「そのまま両手を上に上げて」

ゆっくりと握りこぶしを上げる。そのこぶしに相手が疑問を浮かべた直後。

「いれでもくっらえー」

アルトは振り向きざま、握りこめたこぶしを開いた。

飛び出したのは砂。突如少年の手のひらから飛び出した砂に虚を突かれた敵は正面から大量の砂を被った。それと同時にアルトは女性の拳銃を奪い取ると相手の腹部を蹴り飛ばした。細い体が地面を転がり、白いワンピースが砂に塗れる。

よろよろと立ち上がるテレサ。口元に付いた砂を左手で拭う。それと同時に空いた右腕を軽く揺らした。上着の袖から抜き身のナイフが現れ、彼女はそれを危なげもなく柄の部分だけを掴んで構えると目の前に走り出した。

アルトは奪った拳銃を眼前の敵に構えると躊躇することなく発砲した。螺旋を描きながら高速で進む弾丸。テレサはナイフを横に薙いでそれを弾き飛ばした。

「なッ……!?!」

あまりの離れ業に思わず声を漏らす。その間にもテレサは距離を詰めるとアルトの懐に潜り込んだ。直後、煌めく刃。アルトは体を反らしてナイフの切り上げを避ける。しかし鋭利な切っ先が頬に傷を残した。

「くそっ!」

銃口を下に向けようとした瞬間、彼の足に小さな痛みが走り、視界が90度横に回転する。足を掛けられたと気が付いたときにはもう、制御を失った体が頭から地面に激突していた。

反射的に敵の方へとアルトは振り向く。

鋭利な切っ先が彼の瞳を貫く寸前で止まっていた。

6話

パチパチと爆ぜる焚き火が深い夜に明かりを灯す。草木も生えな
い砂漠のどこから薪を集めたのは知らないが、少なくとも目の前で
爛々と燃えているのが焚き火であることに間違いはない。

アルトはその炎を眺めながら自分の両手首を後ろで縛る縄の痛痒
さにもどかしさを感じていた。

こちらのことなど意に介せず、薪を足しながらマグカップをあおる
テレサを覗む。

あの後アルトは命を取られることなく拘束され、どういうわけか
さつきまで殺し合いをしていた人間と明かりを囲んでいた。

「なんで殺さなかった？」

「……」

かえってきたのは沈黙。ため息を一つ吐いてアルトは横に寝そ
べった。

テレサはその姿を一瞥してから、ゆっくりとマグカップから唇を離
す。

「あなた、さつきのBMに心当たりは？」

数刻ぶりに交わる視線。

「……知らない」

女性は無言で『カチャリ』と腰に下げた銃を鳴らした。

「本当に知らないんだ。それに俺はもう、ダガー乗りじゃない」

視線を下に落とすアルト。焚き火の光に照らされる彼の瞳をじつ
と見つめると、テレサはもう一度マグカップをあおる。中身を一口飲
み込むと彼女は熱のこもった吐息を漏らした。

「そう、元ダガー小隊のあなたなら知っていると思っただけど、思い違い
だったよね」

マグカップを地面に置き、徐に立ち上がるテレサ。右手には一振り
のナイフが握られていた。

「ならもう、あなたは必要ないわ」

ゆっくりとアルトの下に向かって彼女が歩み寄る。炎で深まる顔

の陰影と蔑むような瞳にアルトの体中から滝のような汗が流れだす。体を必死に振じらせ縄を解こうとするが硬く縛られたそれが解けることはない。

のたうち回る芋虫の目の前でテレサは立ち止まると彼の体を地面へと強引に打ち付けた。

右膝で彼の腰部を押しさえつける。アルトはジタバタと足を動かすが彼の体はびくともしない。

「暴れないで、大人しくしてないとケガするわよ」

そういつてナイフを構えるテレサ。

「そんなもんで刺されたらケガする以前に、俺が死——」

言い終わるよりも先に彼女のナイフが彼の背中を横に薙いだ。

「ぐっ……！」

目を強く閉じる。しかしいくら待っても痛みが彼の体を両断することはなく、むしろどういいうわけか手首に解放感を感じていた。腰部を押しさえつけていた重さが消える。

ゆっくりと目を開くアルト、恐る恐る彼は背後を振り向いた。踵を返し、元の場所に戻っていくテレサの姿が目についた。

自分の腕を動かすと。何事も無かったかのように彼の腕は自由な動きを取り戻す。アルトは起き上がると、先ほどと同じ位置に腰を下ろしたテレサを睨んだ。

「どういう、つもりだ?」

「あなたは必要ない。そういったはずよ」

アルトの視線を意に介さず、テレサは新しいコーヒーを注ぎ入れると、もう一度マグカップをあおった。自分に一切の関心を持たなくなったその瞳にアルトは奥歯を噛み締める。

「じゃあ……なんで殺さない!?!」

自身の心臓に手を当て、彼は目の前の涼やかな顔に向けて吠えた。煩わしそうにマグカップを口から離れた彼女の眼が鋭さを増す。

「……そんなに死にたいの?」

一瞬、アルトの体から血の気が引く。

この距離ならば彼女は一切の予備動作なしで自分の息の根を止め

ることが出来る。彼女がその気になればアルトの命はすぐにでもこの場で絶たれる。不条理で無常な確信が彼の中に滲んでいく。

「クソツ……い！」

小さく悪態を吐いてアルトは自分の拳を握りしめた。

「それが嫌なら今すぐここから消えなさい」

テレサは奪っていたアルトの拳銃を彼の下に放り投げると立ち上がった。

「どこへ行く？」

拳銃を拾い上げたアルトが訪ねるとテレサは自身の細い体を覆い隠すほど巨大なレールガンを担ぎあげ、まだ熱の籠る口を開いた。

「さっきの戦闘で私の機体もそれなりにダメージを受けた。修理に使えるパーツがないか探す」

明かりから離れ、闇の中にテレサが消えていく。アルトはその影が完全に暗闇に溶けてなくなるまでじっと睨み続けることしかできなかった。

吐いた息が白い霧となって夜に溶ける。熱いコーヒードラムで温めた筈の体は芯まで冷え、小刻みに震えを繰り返す。BMや戦車、戦闘機の残骸が散らばるキャンプ跡にテレサの足跡が散乱していた。テレサは半壊したアイゼンMk2の中に埋めていた顔をゆっくりと外に出す。

「あまり良いものは使っていないわね」

取り出したパーツを確認し用がない物だとわかると、手に持っていたガラクタを放り投げた。

白く透き通った手の平が黒くヌメついたオイルに塗れる。それを気にする素振りを見せずに彼女は頬の汗を手の甲で拭いた。淀んだ黒が頬を擦り、幾億の陶器よりも価値のある白い肌を汚す。

テレサはガラクタだらけの自分の足元を見つめた。

「このあたりの残骸は調べ尽くしたか……」

落ちていくパーツを足で払い除け、先へと進む。暗い闇の中を歩き続けていると彼女の視界にうっすらと白い靄がかかった。その場に足を止め周囲に目を配る。

火事のような肌の焼け付く感じはない。むしろ湿った空気が辺りに充満している。テレサは靄の中へと慎重に一步を踏んだ。

——チャプン

踏み出した足が沈み込む。咄嗟に足を戻し、彼女はその場にしゃがみこむ。白かった視界が開けると波紋に揺れる自分の顔が目の前に映し出されていた。ゆっくりと自分の顔に手を差し伸べる。鏡面に触れた瞬間、彼女の細い指先から波紋が広がり、再び水面を揺らした。「温かい……」

寒さに悴（かじか）んだ指が熱を取り戻していく。近くを確認すると灼けた鉄パイプや歪んだシャワーヘッドが散乱している。どうやらここにはシャワー室があったらしい。

立ち上がり靄の向こうにテレサは目を凝らす。直径3mほどの穴にお湯が貯まっている。底に破裂した水道管のようなものがあり、おそらくそこからこれが溢れ出ているようだ。

テレサが右を向くとそこには下半身を失ったハンマーが仰向けに倒れていた。多くのパイロットに愛されるローエンド機体の右手には赤熱したヒートナイフが握られており、その切っ先が水面に沈んでいた。

酷く歪んだ胴体の形からして中のパイロットはもう生きてはいないだろう。今はまだ赤く燃えているこのナイフもあと数時間もすれば熱を失いたただの鉄塊と化す。

テレサは自分の手を見る。黒ずんで汚れた手。首筋にも不快な汗の感触がまわり付いている。

彼女は最大限の警戒を周囲に払う。一切の危険がないことを確信すると彼女はオーバーサイズの上着に手を掛けた。

布の擦れ合う音が静寂の中に響く。彼女の上着が静かな音を立てて地面の上に落ちた。

小さく爆ぜる炎が膝を抱えたアルトの瞳で光を揺らす。途切れることのない緊張と度重なる戦闘による疲労でアルトはこの場から動く気力を失っていた。アルトは顔を伏せて体を丸くする。

感じるのは無力感と孤独。たった半日前までは鬱陶しく思ってい

た少女たちの喧騒が今ではとても恋しい。

瞼の裏によく知る二人の顔が浮かび上がりまた闇の中に消えていく。二人の無事を願う度に心臓が激しく脈を打つ。

こぶしを握りこみ、ゆつくりと伏せていた顔を上げる。小さくなった炎が彼の瞳に明かりを灯した。

「こんなこと、してる場合じゃないな……」

深く息を吸い込み、アルトは立ち上がる。見上げた空には悠々と輝く満月が星々の中心に浮かんでいた。

アルトは視線を地上の方に戻していく。その途中であるものが視界の端に止まった。ゆつくりと彼の足がその場所へと向き、目の前で足が止まった。

彼が見た先にあつたのは巨大なシートで覆われた物体。今日のよくな月夜でなければきつとこれだけ巨大なものにすら気が付くことはなかっただろう。それほどに丁寧な偽装がこのシートには施されていた。

アルトはシートの端をわずかにと持ち上げると中を覗き込んだ。暗くて中を見ることはできないが人の気配は無い。シートの奥に潜り込むと上着の内ポケットから懐中電灯を取り出し、明かりを点けた。

「これは……」

光を反射し輝く白と紅碧の装甲。この特徴的なカラーリングを見るのはいったい何度目だろうか。立ち膝を付いたディアストーカーの頭部カメラが予期せぬ侵入者を睨む。アルトは機体の傍に近寄りその姿を見つめた。

純白の装甲に指を添える。穢れのない色とは裏腹に表面にはいくつもの細かな傷とそれを修復した跡があり。この機体が彼女と共に無数の戦場を駆けてきた事が容易に想像できた。

彼女ほどの実力者であれば、オーダーメイドとはいえ新しい機体を用意することなど難しくくない。それはつまりこの機体はテレサにとって何らかの強い思い入れがあるという証拠だろう。

一見すると外見ではそこまで大きな傷は見られず、戦闘が困難にな

るほど破損しているようには思えない。

おそらく内部部品に何らかの問題があるのだろう。

「両腕をもがれて足も動かせない俺のBMに比べたらまだマシか……俺の、BM……？」

一瞬、彼の頭の中にある考えが浮かぶ。それは失敗すれば今度こそ彼の命運は此処で尽きる賭けであり、おそらくこの停滞した状況を唯一打破できる最後の可能性でもあった。

わずかな時間の葛藤の末、アルトは自分を見つめ続けるディアストーカーの藤色の瞳を見ると小さく喉を震わせた。

「……賭けてみるか」

陶器のようになめらかな足が砂漠の砂に足跡を残し、揺れた二藍の髪の毛からわずかに残っていた雫が宙を舞いながら静かに風を切る。

まだ体を包む熱が冷めきれない様にテレサは足早に拠点へと戻っていた。

有用なパーツを見つけることはできなかったがまだ機体が完全に動かなくなったわけではない。極力戦闘を避けて行動すれば次のキャンプまでは行けるだろう。もし、仮に戦闘を行うほどの状況になったとしても彼女を超える操縦技術を持つパイロットはそう簡単に現れはしない。

(作戦を練り直さないと……)

そう考えながら拠点の近くに来た瞬間、テレサの動きが止まった。揺れる炎の前に一つの影が静かに佇んでいる。

テレサは懐から拳銃を抜き出すとそれを構えたまま人影へと近づいていく。足音に気が付いた影が振り向くのと同時にテレサもその正体に気が付いた。

「思ったより遅かったな」

青い瞳がテレサの瞳を捉える。テレサもまた、目の前の少年に向けて銃口を向けた。

「……あなた、まだ居たの？」

銃を突き付けられた少年『アルト』は静かにテレサの顔を見つめた。

「使えそうなパーツはあったか？」

先程までの戸惑いと不安に満ちた声とは違うしつかりと耳に伝わる声。どこか威圧すら感じる表情の変化にテレサは内心驚きを感じていた。

「その感じだとまともな物は見つからなかったみたいだな」

テレサの心情の変化を読み取ったかのようにアルトが言葉を繋げる。それを遮るようにテレサはアルトの眉間に銃口を突き付けた。

「ここに残ったということは、本当に死にたいということではないかしら？」

彼の頬を一筋の汗が流れる。二人の間を流れる静寂。焚き火の中で炎が小さく爆ぜた。

「……取引をしないか？」

少年の声が微かに震える。しかしその目はまだ強く彼女の瞳を見つめていた。

「取引……？」

「俺のアイアンヘッドはもう動かせない。けれど関節部以外のパーツはまだ使える」

「……つまり、あなたの機体から拝借したパーツで私の機体を修復させるか？」

アルトの首が縦に動く。

「それであなたの要求は？」

「次の拠点キャンプまで俺を乗せていってくれ」

再び起こる静寂。次はテレサの口が先に開いた。

「悪い話ではないわね」

「なら交渉成り——」

「——でも駄目よ」

アルトが言い切るよりも早くテレサが言葉を返す。

「あなたを乗せるメリットがない」

「そして……」テレサの拳銃に明確な殺意が宿る。

「今ここであなたを殺した後に同じことをすれば済む話よ」

引き金に指が掛かる寸前……

——カチッ

砂漠に響く小さな爆発音。テレサの視線が爆音の方へと向かう。爆風に煽られ、捲られる巨大な布。そこから現れたのは立ち膝を付いた鉄の巨人。

「ディアストーカー!？」

テレサから初めて驚きの声が漏れる。

「悪いけど、アンタの機体に爆弾を仕掛けさせてもらった」

ゆっくりとアルトが立ち上がる。彼の手には赤いスイッチが付いた円筒状の棒が握られていた。テレサがアルトに向けて拳銃を構えなおす。

「——動くな!」

アルトの怒声が周囲に響く。それに気圧され彼女の動きが止まった。

「あの機体、随分と大切に使用してるみたいだな。少し見させてもらったよ」

「……要求を？まなければ次は機体を爆破する」

テレサの表情に戸惑いが混じる。

突き付けられた銃に対抗するかのよう不起爆スイッチをテレサの目の前に掲げる。アルトは続けて言葉を放つ。

「今、俺に必要なのはこの状況を脱せる力、そしてアンタに必要なのは力を引き出すためのパーツ。お互いに利害は一致しているんじゃないか？」

一歩、アルトの体が前に進む。交差する視線。睨みあう二人。その末に武器を下ろしたのはテレサだった。

「わかったわ。その条件を呑みましよう」

その言葉に周囲を漂っていた緊張の糸が緩む。アルトもゆっくりと自分の手を下ろした。

「今度こそ、交渉成立だな」

テレサは無言でその場を離れ機体へと歩いていく。彼女が通り過ぎた瞬間、アルトの全身から力が抜け彼はその場に座り込んだ。

「死ぬかと思った……」

深いため息が口から漏れる。自分の手に握られたスイッチを見つ

め、疲れた笑みを浮かべる。彼は親指でゆっくりと赤いボタンを押し込んだ。

弱い風が青い前髪を揺らす。しかし空気を震わす爆音が響くことはなかった。

「一発分が限界だったしな。それに……」

歩み寄り安否を心配する主人とそれを迎え入れるように片膝を付く巨人。言葉の続きを言いかけたまま、疲労と緊張の限界を超えた彼の意識はゆっくりと夜に堕ちていった。

6. 5話

——ダガーとの戦闘から二時間後。

激しい戦闘の音が遠ざかり、砂漠を吹き抜ける寒風が膝を抱え込む少女の真つ赤な髪を微かに撫でる。その表情はどこか浮かぬ顔をしていた。

そんな彼女の目の前に一杯のマグカップが差し出される。少女の視線が弱々しく腕の先を辿った。

「ハーブティーよ。飲みなさい」

曦夜が差し出した湯気の立つマグカップを一瞥してシャロは顔を俯かせた。

「……いらない」

曦夜は小さく息を吐き出すと彼女のマグカップを地面に置いて自分のハーブティーに口を付ける。香草の華やかな香りが曦夜の鼻孔をくすぐり、乾いた彼女の喉を潤した。

熱い吐息を吐き出した曦夜は目の前でうずくまる少女の姿を見る。

「いつまでそうしているつもり？」

苛立ちの籠ったその言葉にも相手は一切の反応を見せない。曦夜は呆れた様のため息を吐き出すと地面に腰を下ろした。沈黙が二人の間に漂う。

「戻らなきゃ……!」

徐に立ち上がるシャロ。彼女はおぼつかない足取りで自分の機体の方へと歩き出した。

「ちよつと、戻らなくてどこに行く気よ!」

慌てて曦夜も立ち上がり、少女の肩を掴む。

「離せ! 戻ってアルトを助けに行くんだ!」

振り払おうとシャロの体が暴れる。

「ちよつと! 少しは落ち着きなさいよ!」

進もうとするシャロと引き留める曦夜。二人は揉み合い、互いの顔が向かい合った。

『ポタリ』と曦夜の腕に水滴が落ちる。濡れた少女の目には涙が溜

まり、自身の髪よりも赤らんだ頬には一筋の涙の跡が残っていた。じわりと少女の瞼に涙が溜まる。

「シャロ……」

ゆつくりとシャロの腕から力が抜けていく。

「アタシ、アルトのこと見捨てちゃった……」

曦夜もまた彼女の肩から腕を下ろした。

「アタシがもつと強くて、アルトの隣で一緒に戦えるだけの力があれば……」

次第にまた少女の顔が俯いていく。

「いつもアイツばっか無茶な目にあわせて、それなのにアタシは、アタシは……」

ポタリと少女の足元に涙が零れる。少女の小さな握りこぶしが震えていた。風が吹けば消え入りそうな声で少女は呟く。

「アタシ……アイツの主人失格だ」

その姿を何も言わず見つめていた曦夜は一度視線を彼女から外すと呼吸を整え、再度目の前を向き直った。

「……シャロ」

自分の名前を呼ぶ声にシャロは顔を上げる。曦夜の鼻先が視界に入った瞬間、彼女の頬に痛みが走った。

九十度変わる景色。空気の破裂音が辺りに響き、宙に舞った帽子が音を立てずに砂の上へと落下した。

最初、痛みの正体に気が付かなかったシャロだったが曦夜の震えた右手を見て自分が頬を叩かれたことに気が付いた。今度は胸倉を両手で勢いよく掴まれ視界全体が少女の顔で覆われる。その表情に含まれた感情の大半を怒りが占めていることは誰が見ても明らかだろう。まだ涙が残るシャロの瞳を曦夜が睨みつける。

「何を弱気になってる！　こういう時にこそアンタが相棒のことを誰よりも信じなきやいけないでしょうが！　アイツは自分から私たちを逃がすことを提案した。だったら少なくとも生きて再会する自信があるってことでしょ！　それともなに？　アイツは自分の相棒にあれだけの大見栄きっておきながら生き残れないほど弱いやつな

の!?!」

畳み掛けるように叫ぶ曦夜。彼の名前が出た瞬間シャロの肩が小さく揺れる。それを見た曦夜はシャロから手を離すとわざとらしく息を吐き出した。

「まっ、所詮はアンタみたいになちんちくりんが選んだへっぽこパイロット。遅かれ早かれどこかで野垂れ死んでたわよ」

言い終えた瞬間、彼女の襟に少女の細腕が伸びる。まだ涙の残る濡れた瞳が曦夜を力強く見つめていた。

「アルトは、弱くなんてない!」

鼻先が擦れるほどの近さで見つめ合う二人。曦夜はシャロの顔を真っ直ぐに見つめ返す。

「だったら、弱気になってないで信じなさいよ。あんたの従者でしようが」

曦夜の言葉にシャロが「はッ」となる。掴む力も弱まっていき最後には掴んでいたその手も離れた。

「もしかしてアタシのこと氣遣って……」

「勘違いしてんじゃないわよ。アンタがそんなだところちまで調子が狂うっただけ」

今日一番大きなため息を吐き出して曦夜はシャロに背中を向ける。

「今夜は疲れた。もう寝るから何かあるまで絶対起こすんじゃないわよ」

そう言って彼女は自分の機体まで歩き出した。

「待って、曦夜」

その後ろ姿をシャロが呼び止める。

「ありがとう」

一瞬足を止めるが、すぐにまた歩き始める曦夜。しかししばらく歩いてから彼女はもう一度だけ足を止めた。

「ハーブティー。ちゃんと飲みなさいよ」

そういつて今度こそ彼女は機体の方へと歩いて行った。

シャロはその後ろ姿を最後まで見送ると足元に置いてあったマグカップを拾い上げ中身を啜る。時間が経って冷めた筈のそれは少女

の心をわずかに温かくした。

静けさの戻った砂漠で少女は星空を見上げる。幾億という星の中で少女は青い星と並ぶように光る赤い星を見つける。少女は決意するのように、願うようにその星に向けて呟いた。

「アタシは死なないよ。だからアルトも……」

しばらく星を見つめていたシヤロはハーブティーを飲み干すと落ちた帽子に付いた埃を払い被り直す。そして自身も機体の中へと戻っていく。

帽子に阻まれて見えなくなった夜空で青い星が彼女の言葉に呼応するように一瞬、強く輝いた。

存在理由

7話

雲一つない空。燦々と降り注ぐ真昼の太陽が一軒の民家を照らしていた。小窓から差し込んだ光が工作机の上で動く少女の白い手を照らす。机の上にはカッターマットが敷かれており、工作用の工具と大小様々なプラスチックの欠片が散乱していた。

少女は手の甲で汗を拭うと視界に入った紅碧色の前髪を分けた。ふと、少女の視線が前を向く。そこにはBMを模した一体のプラスチックモデルが立っており、その風貌はパッケージのイラストからかけ離れた姿をしていた。藤色の頭部パーツが少女のことをじつと見つめる。

「もうちよつと待っててね。今あなたの武器を作ってるから」
そういつて机の上からパーツの一つをつまみ上げると右手に持っていた棒状のパーツに取り付けた。

少女は武器の形を入念に確認すると取手をプラスチックモデルの右手に持たせた。

「……完成！」

少女が両手で小さな機体を持ち上げる。白い小さなボディが光を反射して輝いた。

今度は机の上に機体を立たせる。足を持つと少女も自身の体を机に這わせた。機体と少女の目が合い少女は微笑みながら床に散乱したランナーの上で地面に着かない足をゆらゆらと揺らした。

突然、玄関のドアが勢いよく開く。少女は驚いて椅子の上で飛び上がると白いワンピースをはためかせ、玄関の方へと走った。

部屋を出て右を向く。玄関には彼女と似た髪色をした一人の少女が立っており、膝は傷だらけで、腕の中には自身の身の丈ほどある巨大なヘリコプターのラジコンが抱えられていた。

「お姉ちゃん!？」

「モデルで遊んでるときに転んだだけ、大したことないわ。それより

あそこの絆創膏持ってきてくれる?」

少女に姉と呼ばれた子供は自分の状態を気にする様子もなく淡々と答えた。

「持つてくるからまず家の中入って!」

「ここでやるからいいわよ、それに中に入ったら家を汚しちゃうじゃない」

「いいから入る!」

少女の剣幕に圧された姉が渋々靴を脱ぐのを見てから急ぎ足で少女は救急箱を取りに行つた。

「このくらい自分でできるのに、ティリーはお節介やきね」

白いワンピースの少女『ティリー』の持つ消毒綿が膝の傷口に当たる。傷口が沁みて少女の体が小さく震えた。呆れた様なため息を吐きワンピースの肩紐がずり落ちる。

「お姉ちゃんは処置の仕方が雑なの! いつも消毒もなしに絆創膏張ろうとするんだから」

「このくらいの傷、放っておいてもそのうち治るわよ」

「……もし将来、お姉ちゃんが会社を立ち上げたとしても私絶対入らない」

呆れ果てた表情の妹に姉は「大げさだなあ」と呟くと工作机に目をやる。机の中心に立つ一台のプラスチックモデルを見つけると首を傾げた。

「あら? あれは何?」

手際よく絆創膏を張り付けたティリーが姉の質問に満足げに笑う。工作机に駆け寄り彼女は自分の機体を両手で持つと姉に見せ、嬉しそうに口の端を持ち上げた。

「私が作ったのよ。かっこいいでしょう?」

妹の柔らかい笑顔を見て姉もまた笑みをこぼす。

「この機体、ベースはフレンチナイトかしら? 随分と手を加えたわね」

少女は首を縦に大きく振って頷くと姉の手元に置いた。

「これは私の専用機! 機体コンセプトはどんな敵も撃ち貫く最強の

スナイパー
狙撃手！」

「狙撃手か……いいじゃない。それで名前はもう決まってるの？」

名前を尋ねられた瞬間、少女の眉間に皺が寄り始める。腕を組み少女は体を揺らしながら「うんうん」と唸った。

「もしかして考えてなかったとか？」

姉の質問にティリーは首を横に振る。

「ずっと考えてはいるんだけど、中々良いのが思い浮かばなくて……お姉ちゃんの『Spilornis』みたいにかっこいい名前みたいに、何かいい名前はない？」

ティリーが姉の足元にあるヘリコプターのラジコンを見つめる。

「かっこいい名前かあ。狙撃手……」

姉の視線が壁へ向かう。そこに立てかけられた鹿の剥製。昔に父が友人と鹿狩りに行った際に仕留めたものらしい。不意に少女の頭の中にある名前が浮かんだ。

「ディアストーカー、なんてどうかしら？」

ディアストーカー
「鹿狩り？」

「そう、RHINEの鹿狩りは決して獲物を逃さない。最強の狙撃手を名乗るにはピッタリでしょ？」

姉が考えた名前を舌の上で転がし、その言葉を飲み込むと目を輝かせた。

「ディアストーカー、いい名前！」

少女は名を与えられた自分の機体を持ち上げて太陽にかざす。姉は妹の後ろ姿を見つめると静かに微笑んだ。

——臃げに意識が戻った時、視界は炎に包まれていた。ついさつきまで新年を祝うために賑わっていた町は悲鳴と恐怖に包まれ鉄の巨人達が建物を蹂躪しながら町の中を闊歩している。自分の体が誰かに背負われていることに気が付くことはできたが朦朧とした意識と焼けた喉では彼女は自分の声を発することは叶わない。それでも彼女が誰の背中におぶさっているのかはすぐに分かった。

自分の後ろで巨大な何かが崩れ落ちる音を聞こえる。

「パパ……ママ……」

少女が好きだった気丈な姉の声は悲しみと恐怖でうわずり枯れていた。少女を背負っていた姉の体が重力に押し戻される。

「ティリー……」

妹の名を呼ぶ姉の声が少女の耳に届いた。

（お姉ちゃん、こんなボロボロなのに私の名前を呼んでくれてる）

少女は悔いた、声を掛けることすらできない己の弱さを。少女は嘆いた、家族を守ることでできない自らの非力を。

「誰か」

（誰か）

それでも今は継るしかなかった。大切な人を救うために。

「誰か……」

（助けて……！）

「お願いです……私の——」

枯れた声と薄れる意識で二人は願った。

「妹を助けてください！」

（お姉ちゃんを助けて！）

雪と灰が舞い散る炎の街で少女たちの叫びが木霊した。

8話

「……」

ゆつくりとテレサの瞼が開き、目の前の景色を映し出す。暗闇の中で静かに明滅する計器がまどろみの中から彼女の意識を現実へと引き上げていく。

パイロットシートから背中をはがすといくつかのスイッチを慣れた手つきで触る。機体に生じた負荷がモニター上で羅列される。それらに通り目を通すとコクピットハッチを開き昇降ロープを伝って地面へと足を下ろした。

擬装用の布を押し上げると地平線の向こうで輝く朝焼けが頬を朱く染める。

風に乗って昨日の戦鬪の残り香が彼女の鼻孔を衝き、それが燃える視界と重なって夢の続きを彼女の脳裏に写すが瞼を瞬かせるのと同じ時にその景色を消し去った。

足元に気配を感じ視線を地面に落とす。マントの切れ端に身を包み腹這い姿の少年が双眼鏡を覗き込んでいた。

「敵は？」

アルトに目を向けることなくテレサは地平線を見つめる。アルトは双眼鏡を下ろし息を吐き出した。

「……いない」

「そう……一時間後に出発するわ。それまでには準備を済ませておきなさい」

それだけ伝えるとテレサは機体の方へと戻っていった。

「……」

彼女の足音が聞こえなくなるとアルトは徐に立ち上がる。羽織ったマントが肩から剥がれ落ち、右手に持った拳銃が鈍い輝きを放った。

太陽が昇った砂漠はいつもの姿を見せて灼熱の地獄を描く。

瓦礫と化したアイアンヘッドL.Gの周りで人影が揺らいで行き交っている。アルトは落ちた右腕の装甲の隙間に工具を差し込んで

自分の方に向けて力を込めた。

「ぐうっ……ふんっ！」

鈍い音を立てながら装甲が剥がれ落ち内部構造が露になる。そこからいくつかのパーツを取り出すと状態を確認し使えそうな物だけを手元に加えてディアスターカーの下へと運んでいく。日除け替わり張られた布の下で仰向けになり、一部の装甲が取り払われた機体の上ではテレサが内部パーツの取り換えを行っていた。

「まだ使えそうな部品を持ってきた。修理の具合はどうだ？」

パーツを地面に敷かれたシートの上に置きアルトは彼女を見上げる。

「もう少しと言ったところかしら」

作業の手は止めずに視線をアルトの隣に並んだパーツへと一瞬移してから戻す。

「なんだよ？」

「いえ別に。ただこんな安物ばかりでよくあそこまで動かせたものだと思います」

「余計なお世話だ……」

アルトは自分の持ってきたパーツの隣に転がっているディアスターカーのパーツを見る。破損して使えなくなっているものの、散乱している一つ一つがカタログでしか見たことのないS級の最高級パーツばかりだ。

「悪かったな。お前みたいなエースと違って俺達にはA級パーツでさえ機体に一つ付けられるかどうかの代物なんだよ」

「でしょうね、まあ最初から期待なんてしていなかったから」

彼女の嫌味に引きつる口角が見られない様、次のパーツを探しに行こうと背を向けて歩き出そうとした時、背後から声が掛かる。

「部品漁りはそのあたりでいいわ。ここからはあなたも修理を手伝って頂戴」

日陰を出かかっていたアルトの足が止まる。

「いいのか？ 俺にそんなことやらせて」

「時間が惜しい。それに動かせるだけのパーツは揃ったわ」

「わざと雑な整備をするかもしれないぞ」

「――爆弾、本当は付いてないんでしょ？」

動揺しそうになった感情に歯を食いしばってアルトは振り返る。

「……どうしてそう思う？」

テレサは作業の手を止めずに口を開けた。

「昨晚の戦闘後から機体の重量バランスは全く変わっていない。そもそもメンテナンスのために全ての個所をチェックしているのだから設置された爆弾の有無を確認するのは当然でしょう？」

アルトは何も言えず項垂れる。しかしため息を一つ吐き出すとアルトは顔を上げた。

「どこから手を出せばいい？」

予想していたよりも穏やかな返答にテレサの視線がアルトへと向く。彼の青い瞳から未だに敵対心が消えたわけではない。それでも先程とは違う意思を彼女は確かに感じ取った。

「……脚部の送電系をお願いするわ」

回収したパーツの一部を拾い上げるとアルトはディアストーカーの右脚によじ登って作業を始めた。

硬くなったボルトを力任せに回す。無造作に投げられたパーツが砂埃を上げて砂の上を転がる。風すら鳴らない砂漠で二人の動く音だけが静かな音を奏でていく。

止めどなく額から湧き出す汗をアルトは自身の腕で拭う。それでも残った雫が頬を伝って零れ落ちフレームに水滴を付ける。首元の汗も拭うとアルトは再び修理に取り掛かった。

「いきなり素直になったみたいだけど何か心境の変化でもあったのかしらっ？」

テレサが手を止めて話しかけるが反応がない。無言で作業を続ける彼を見ると自身もまた手を動かさなかった。

「……何も変わってなんかいない」

遅れて来た応えに再びテレサは再び手を止める。

「今でもアンタのことが憎いさ。あの人達の命を奪ったアンタが」

握り拳に力が籠る。テレサは何も言い返さず無言で彼の言葉の続

きを待つ。

「だから二度と失いたくないんだ。それが仇の力を借りることになっても俺は、大切な人達をもう……」

しばらくアルトは黙り込む、しかしすぐにまた手を動かし始めた。

(大切な人達……)

テレサの脳内で幼かった頃の記憶が蘇る。それが炎で焼かれる前に彼女は自身の思考を中断した。

「なら、早く修理を終わらせることね」

「……ああ」

それ以降二人が口を開くことはなく、着々と修理は進んでいった。

太陽の一部が地平線の向こうに埋もれはじめた頃、ディアストーカーのコクピットではテレサが機体のチェックを入念に行っていた。次々と機体の情報がモニターへと映し出される。それ等全てを自身の頭の中に叩き込むと彼女はコクピットを出た。

「動きそうなのか？」

横たわるディアストーカーから降りて来たテレサにアルトは問いかける。

「何とか動くことはできそうね。ただ機体の損傷具合もあって本来の力は出せそうにないけれど」

地面に足をつけたテレサは目を伏せて言う。アルトもまた彼女の言葉に小さく息を吐き出した。

「すぐに出発を？」

「そうしたいところだけれどもう夜になる。機体が完全じゃない状態で夜間の行動は得策ではないわ」

「なら、野営の準備にかからないとな」

テントを抜けて夕暮れの砂漠をアルトは歩き出す。その日差しを解体されたアイアンヘッドが遮った。

「待っていてくれ、二人とも……!」

アルトがシャロと別れテレサに出会った後のこと――

ほうきが埃を掃く音と皿の重なる音が響く店内。『酒場バビロン』の営業が終わった早朝、数時間前の喧騒はネオンの光と共に消え去り太陽が町を照らし始めていた。

「女将さん、キッチンの片づけ終わりました！」

銀髪の少女の声が疲れを感じさせない笑顔で厨房から顔を出す。酒場の主人のヴァネッサはほうきを動かす手を止めると暖かい朝日のような優しい笑みを少女に向けた。

「ありがとうハヤ。今日はもう上がって大丈夫よ。お疲れさま」

ハヤと呼ばれた少女は「はい！」とその言葉に頷いて店の奥に入っていた。ヴァネッサは腕を上げて背筋を伸ばす。噛み殺したあくびが口の端から漏れた。ふと、ぼやけた視界の隅に人影が映り込む。彼女が振り向くと黒いコートにフードを被った人物が依頼書の掲示板をじっと眺めていた。

一体いつからそこにいたのかはわからない。少なくとも店を閉めてからは一度もハヤ以外の気配は店内にはなかったはずだ。まるで幽霊のようなその人物に彼女は警戒しながら歩み寄る。

「あのお客さん？ 今日営業は終了したはずなのだけど？」

自身を尋ねた声に気が付いたその人はフードを下ろす。艶やかな白髪が露わになり、宝石のように赤い瞳がヴァネッサを捉えた。

「そなたがこの店の主人『ヴァネッサ』殿か？」

どこか時代錯誤な喋り方を奇妙に思いながら彼女は首を縦に振る。

「ええ、そうだけど？」

「おお！ 俺はよかった！ 実はお訊ねしたいことが……」

そういつて白髪の女性はコートの内ポケットを弄る。

「だから今日はもう終わりで……」

彼女の言葉が聞こえていないのか携帯端末を内ポケットから取り出して操作し始めると一枚の画像を見せた。

「——この依頼書を探している」

画面に写った依頼書にはテロ組織の残党討伐とそれに見合わない報酬が提示されていた。その依頼書を見た瞬間、ヴァネッサの表情が険しくなる。

「……これ、ウチの許可印がないわね」

「許可印？」

彼女が写真の右下を指差す。

「ウチも信用あつての商売だから、酒場に依頼書を通す前に必ずその依頼を精査してから掲載するための印しを押すの。それが許可印」

女性はもう一度隣の壁を見る。確かに掲示板に乗せられた依頼書にはどれもバビロンのエンブレムが押印されていた。

「ねえ、あなたその依頼書があつたのはこの店で間違いない？」

訝しむように見つめられた女性は迷いなく頷いた。

「ええ、シヤロ殿から送られてきたデータではこの店からのもので間違いありません」

ヴァネッサは頬に手を当てると小さくため息を漏らした。

「困ったわね……きつとこれを見て参加した人はたくさんいるでしょうし。何とかしたいけどとてもじゃないけどここからじゃ遠すぎて……」

「——お困りの様ね。よろしければ手を貸しましょうか？」

ドアの方から声が響く。振り向いたヴァネッサは声の主を確認するとわずかに口角を上げた。

「……丁度、貴女みたいな人を探していたところよ」